



アフリカ経済史研究の新展開をめぐる諸問題：アフリカ史研究の「アフリカ化」と「主流化」の動向に準拠して

その他のタイトル	Africanizing and Mainstreaming Africanist Economic Historiography in the Discourse of World/Global History
著者	北川 勝彦
雑誌名	関西大学経済論集
巻	70
号	1-2
ページ	309-358
発行年	2020-09-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00020713

研究ノート

アフリカ経済史研究の新展開をめぐる諸問題

—アフリカ史研究の「アフリカ化」と「主流化」の動向に準拠して—

北川 勝彦

要 約

本研究の目的は、アフリカニスト史家によるアフリカ経済史研究の「アフリカ化」と経済史研究におけるアフリカ経済史研究の「主流化」の可能性を探求しようと試みるところにある。具体的には、1960年代以降、世界のアフリカ史研究を牽引してきたテレンス・レンジャーの問題提起—アフリカ史はどれほど「アフリカ化」し、歴史研究の「主流」となってきたのか—に準拠しつつ、とりわけ20世紀後半から現在に至る UNESCO を中心としたアフリカ史の「アフリカ化」およびグローバル・ヒストリーにおけるアフリカ史の「主流化」の試みを検討し、さらに21世紀初頭に現れたアフリカ経済史研究の新展開をめぐる諸問題の考察を通して本研究の目的を追求した。以上の考察に基づいて、アフリカニストによるアフリカ史の記述とアフリカ経済の史的分析に当たっては、「アフラシア学」の先駆者アリ・マズルイが提起した4つの歴史的洞察の視点—indigenization, domestication, diversification, horizontal interpenetration—の重要性が認識されるにいたった。

キーワード：アフリカ史、アフリカ経済史、アフリカ化、主流化、
経済学文献季報分類番号：04-10；04-23；04-50；07-40

目 次

- 1 序—本研究の課題—
- 2 アフリカ史研究の「アフリカ化」と「主流化」の準拠枠組
- 3 アフリカ史研究の「主流化」の試み—UNESCOにおける「アフリカ史」と「人類史」のプロジェクト
- 4 経済史研究におけるアフリカの「主流化」
- 5 南アフリカにおける歴史研究の新展開
- 6 結び

1 序—本研究の課題—

アフリカは、近年、大きく変貌している。21世紀に入り経済成長も持続的となり、アフリカ諸国は、経済成長率で世界のトップ10か国のうちで半数を占めている。もちろんアフリカ諸国間およびアフリカ各国の内部においてはさまざまな格差が存在することは事実であるが、近年のアフリカの台頭と非アフリカとの関係の新展開には著しいものがある。(Kitagawa and Takahashi 2016b, Mkandawire 2015)

このような状況の中で、国際連合（United Nations, UN）では、2000年から2015年までの「ミレニアム開発目標」（Millennium Development Goals, MDGs）の取組が一段落し、2016年以降、新たな「持続的開発目標」（Sustainable Development Goals, SDGs）への取組が開始された。¹⁾ 次いで、アフリカ連合（African Union, AU）は、1963年に結成された「アフリカ統一機構」（Organization of African Unity, OAU）50周年をむかえ、21世紀中葉以降を見据えた「アジェンダ2063」（*Agenda 2063: the Africa We Want*）を策定し、今後のアフリカの進むべき方向を示した。(AU 2015)²⁾

翻って近年の日本とアフリカとの関係を見ると、注目すべき枠組みとしては「東京アフリカ開発会議」（Tokyo International Conference on African Development, TICAD）の取り組みをあげることができる。TICADは、1993年から2013年まで5回にわたって日本国内、具体的には東京と横浜で開催されてきた。(Kitagawa 2013, 2020, Amakasu Raposo de Madeiros Carvalho 2014) しかし、最近の国際関係の変動とアフリカの台頭を背景にして、2015年2月に日本政府は新しい「開発協力大綱」（Development Cooperation Charter — For peace, prosperity and a better future for everyone —）を策定し、TICAD6（2016年）については新枠組で対処することを決定した。すなわち、これまでと異なり、TICADは3年に1回、日本とアフリカのいずれかの国と交互に開催されることになった。2016年8月27日と28日には、ケニアのナイロビでこの新枠組に基づいてTICAD6が開催された。また、2017年6月16日、日本政府は2019年のTICAD7の開催地を横浜とすることを閣議決定し、同年8月28日～30日にパシフィコ横浜でTICAD7は開催された。こうした動向は、日本とアフリカの関係、広くは東アジアとアフリカの関係の在り方に再考を迫るものであった。(Amakasu Raposo de Madeiros Carvalho et al 2018, Iwata 2020)³⁾

以上のようなアフリカの台頭およびアフリカと非アフリカとの関係の構造変化を目の当たりにしたとき、この現状をどのように理解するかは、各論者の立場の違いや意識する時間の取り方によって異なるであろう。たとえば、19世紀末から21世紀の始まりにいたる期間を

「長い20世紀」として見た場合、「現在」は、「長い20世紀」と「新たな長い一世紀」との結節点あるいは移行期と考えられるであろう。(Freund 2005) そのように考えてみると、現在は、アフリカに生じてきた多様な事態の展開の歴史・現状・構造の研究に関わってきた「アフリカニスト」自身と「アフリカニストの歴史研究」(Africanist Historiography)も「再定義」ないし「再概念化」が迫られる時にあたっているようにも思われる。(Freund 2016)

アフリカ史研究においてこれまでもしばしば議論されてきた問題の中には、歴史的考察あるいは分析の「時間単位」と「地域単位」がある。時間単位の取り方としては、10年、50年、100年、150年、500年、1000年など、分析対象とそれに基づいて何を論じるかによっていずれが適当か考えねばならないであろう。(Arrighi, Hamashita and Selden 2003) また、地域単位としては、ごくミクロな地域 (local)、そうした地域の連関によって形成されるやや広い地域 (regional)、あるいは大陸全体 (continental) および海 (sea) と洋 (ocean) を介してつながる大陸外の域圏など、論じるテーマによって取り上げ方はさまざまであった。⁴⁾

それだけでなく、これまでのアフリカ史研究において取り上げられてきた課題ないしテーマも実に多様であった。「長い20世紀」という時間単位を想定してアフリカ史の展開を考えてみると、そうしたタイムスパンで浮かび上がってくる最も重要な問題としては、「植民地支配の衝撃」(colonial impact) という実に刺激的な現象に思い当たる。この問題をめぐって膨大な研究史が蓄積されてきたことはアフリカ史に少しでも関心をもった研究者であれば周知のことであろう。(Boahen 1987、栗本・井野瀬 1999、井野瀬・北川 2011) この衝撃の解釈をめぐっては、大きく分けるとアフリカに対して重大かつ深刻な影響があったとする“epic paradigm”とアフリカ史の展開にとってさほど大きな影響はなく長い歴史の一エピソードにすぎないとする“episode paradigm”が見られたことはよく知られている。こうした相違は、各論者がアフリカ史における現在の位置づけ、現在のアフリカで展開されている事態をどのように解釈するか、その「現在意識」(present mindedness) の違いによって生じる。この論争は、今日にいたっても決着がついたわけではない。(Cooper 2014)

また、最近の100年間のアフリカの歴史を考えるにあたって、アフリカにおける「国家と民族の不一致」を「国家史(誌)」の問題として議論される場合がある。(小川了 1998、Young 1994, 2012) それを象徴するものとしては、『ベルリン会議の呪い』(*Curse of Berlin Conference*) (Adebayo 2008) や『国民国家の呪い』(*Curse of Nation State*) (Davidson 1992) という表現が使われたりした。すなわち、現在のアフリカ諸国の境界は、1884年～85年に開催された「ベルリン西アフリカ会議」において、当時のアフリカの諸民族の意向を

まったく無視してヨーロッパ諸国間の競争する利害を調整するために恣意的に決定されたのである。したがって、ある民族が複数の植民地国家に分断された場合もあれば、複数の民族がある植民地国家に統合されるという事態が発生した。「国家と民族の不一致」という現象は今日にいたるまでアフリカにおけるさまざまな紛争の原因の一部となっている。(Smith 1983, 1986、ホブズボーム 2001、ゲルナー 2000、川端・落合 2008)⁵⁾

それに加えて、アフリカと非アフリカの関係の歴史と現状を考えるうえで等閑視できない問題は、アフリカから遠く離散し世界各地で暮らしている「アフリカ人ディアスポラ」(African Diaspora)の存在である。この現象は、「長い20世紀」において生じただけでなく、奴隷貿易の時代をはじめとして長期にわたる大西洋、インド洋および地中海におけるアフリカ人の移動を背景として生じた。この問題は、アフリカ史を語り書く上で欠くことのできない重要な課題であることは言うまでもないであろう。⁶⁾ つい最近まで、アフリカ(史)あるいはアフリカと非アフリカとの関係(史)を書く場合、その「表面」と「断面」はともにその一部を取り出して断片化して語られることが多かった。これをどのように修復し、接続することができるのであろうか。「断片化されたアフリカ」(fragmented Africa)史とは異なるオルターナティブな、「接続されるアフリカ」(connected Africa)史あるいは「トータルなアフリカ史」(total history of Africa)をどのように描き出すか、これは、アフリカ史研究の非常に興味深いが困難な課題であるといえる。⁷⁾

次に、アフリカ史が歴史学一般、あるいは世界史、また、最近ではグローバル・ヒストリーと疎遠な関係にはない学問であるとすれば、これらとアフリカ史の関係をどのように理解するか、その場合にどのようにアフリカ史を位置づけるか、という課題がある。アフリカはこれまで世界(国際社会という場合もある)によって無視され、お荷物扱いされてきた。今日でも、学校教育で使用される社会科の教科書におけるアフリカの記述は少ない。(永原 2001、富永 2002) 日本国内の新聞や雑誌にどれほどアフリカの記述がみられるか、また、見られたとしてもどのように扱われているか、読者によって印象は異なるかもしれないが、アフリカ史研究に携わるものからは再考を促したい点が数多くみられる。(鈴木 2005)

かつて川端と落合を中心にして実施された「アフリカと世界」プロジェクトにおいて、川端は、世界のアフリカ論を振り返り、その変遷を「アフリカ無視」論から「世界におけるアフリカ」論を経て「世界とアフリカ」論への展開として整理した。(川端・落合 2012) このシェーマをアフリカ史研究に置き換えて考えるならば、「アフリカ史不在」論から「世界史におけるアフリカ史」論を経て「アフリカ史と世界史」論への展開として描くこともできるであろう。その場合、アフリカと世界の「つながり方」やアフリカが「つながってきた(いる)世界」をアフリカ史の立場からどのように位置づけ理解するか、が重要な課題になって

くと思われる。それに加えて、ヨーロッパ主軸の「ユーラシア」(Eurasia) あるいは「ユーラフリカ」(Eurafrica) (Hansen and Jonsson 2014, 平野 2002、2014) という地域概念あるいは地域意識からアフリカ主軸の「アフラシア」(Afrasia) (Mazrui&Adem, 2013、峯 2019) あるいは可能であれば「アフリユーロ」(Afreuro) への概念と意識の思い切った転換が求められることになるであろう。⁸⁾

以下、本稿では、第一に、第二次世界大戦後から今日に至るまで、アフリカニストのアフリカ史研究は「アフリカ化」と「主流化（中心化）」に向けて展開されてきたように思われるが、その進展度の検証のための規範枠組みを1960年代初頭にアクラとダルエスサラームで行われた二つの国際会議の成果報告に記された問題提起に準拠して提示する。第二に、戦後のアフリカ史の「アフリカ化」とグローバル・ヒストリーにおける「主流化（中心化）」の国際的な試みとして、UNESCO で実施された二つの学術プロジェクトを概観する。すなわち、第一は UNESCO *General History of Africa* 全8巻の編集プロジェクトであり、第二は UNESCO *History of Mankind* 全6巻および UNESCO *History of Humanity* 全7巻の編集プロジェクトである。第三に、アフリカ経済史研究における「アフリカ化」と「主流化」への動きを知るために20世紀末から21世紀初頭にかけてアフリカの経済的台頭を背景として再燃してきたアフリカ経済史研究の新展開を検討する。第四に、以上のようなアフリカ史研究にかかわる新たな事態の進行を背景にして、これまでアフリカの歴史研究に多大な貢献を行ってきた南アフリカにおいて近年現れてきた社会経済史研究の新機軸について概観する。最後に、今後のアフリカニストによるアフリカ史の記述とアフリカ経済の史的分析に必要と考えられる認識枠組についてマズルイがアフラシア研究において提示した視点に準拠することの重要性を指摘する。⁹⁾

2 アフリカ史研究の「アフリカ化」と「主流化」の準拠枠組

それでは、前節で示唆したアフリカ史研究の「アフリカ化」および「主流化」の進展を知る上でどのような準拠枠組に依拠することが適当と考えられるであろうか。それについて、本稿ではかつて行われた以下のような問題提起を提示しておきたい。

第一は、アフリカ史研究、特にジンバブウェ史研究で世界的に知られたテレンス・レンジャー (T. O. Ranger) が、50年ほど前に自らの編著『アフリカ史研究の新課題』(Ranger 1968) において提起した準拠枠組であり、後年、アティエノ・オディアンボ (Atieno Odhiambo) によっても再提起されたものである。(Atieno-Odhiambo 2002) 第二は、1962年にガーナのアクラで開催された「第1回国際アフリカニスト会議」(The First

International Congress of Africanists) と1967年にセネガルで開催された第2回国際アフリカニスト会議において行われた決議である。¹⁰⁾

(1) テレンス・レンジャーの問題提起

レンジャーは、1965年10月にダルエスサラームの University College の歴史学部で行われた国際会議の論文集の中でアフリカ史研究の「アフリカ化」に関して次のような二つの問題を提起した。第1は、「アフリカ史研究は自らの必要にふさわしい方法とモデルを開発してきたのか、あるいは別の分野で開発された方法とモデルの活用に依拠してきたのか」という問題提起であった。第2は、「アフリカ史の言説の主要なテーマはアフリカの歴史的発展の動態から生まれたものなのか、それとも他の地域における歴史研究にとって重要であるという理由で外部から課されたものなのか」という問題提起であった。(Ranger 1968)

第1は、アフリカ史研究の方法とモデルおよび利用可能な資料に関する問題である。アフリカ史は、考古学、オーラルおよび記述文書の各資料に依拠して研究が進められ、これらの資料にかかわる既存の研究方法の修正と使用される資料の範囲の拡大が常に求められてきた。しかし、特定の課題に関する考古学資料に基づいて行われてきた研究の成果は、同じ課題を対象とする他の学問の成果との比較検証が求められるであろうし、オーラル資料については対象地域の特定のオーラル・ヒストリー研究がどの程度代表的であり、実証面で説得力を有するのかについて、常に検証が求められる。(Denbow 2003, Cordell 2003, Falola and Jennings 2003)

また、アフリカニスト史家には、自らの対象を究明するために利用する資料自体の制約を自覚し、加えて、資料に向き合う歴史家としての自己がそれとどのような位置関係にあるのかを意識しながら、そこから生まれる成果に歪みが生じないようにする努力がたえず求められてきた。(北川 2008)¹¹⁾

さらに、アフリカ史の展開にはイスラームの拡散が大いに関係していたことはしばしば指摘される場所である。古くからアフリカ大陸を舞台に活動してきたイスラームの商人たちが書き記した歴史資料の利用可能性に道を開くと同時に、それを活用することで生まれるアフリカ史像に注目する必要がある。(Robinson 2004)¹²⁾

それとともに、アフリカ史において史実を解釈し、分析するにあたっては、ヨーロッパで開発されてきた歴史分析の概念や方法が用いられることが多かったが、はたしてこれがどの程度の妥当性を持つものなのか、再検討する必要がある。それに加えて、アフリカの歴史は、人類の発展史とは著しく異なる特殊なものなのか、あるいは人類の一般史と共通性を有するものなのであろうか。「世界史」においてアフリカ史の特殊性や多様性が強調される場

合があるが、アフリカ史の展開過程における generality と particularity の関係性をどのように考えるかという課題は残されたままである。(Alagoa 1995)¹³⁾

第2は、アフリカ史で取り上げられてきた主要なテーマに関する問題である。「アフリカ史のアフリカ化」をめぐる重要な課題として、アフリカ史研究でとりあげられてきたテーマがはたしてアフリカ史のダイナミズムの中から生まれ、それを明らかにするうえで意義のあるものであったのか、という問題がある。アフリカ史のテーマとして広く知られている問題には、アフリカの奴隷貿易と植民地支配の本質やそのインパクトをどのように理解するかというものがあつた。それと並んで奴隷化あるいは植民地化過程におけるアフリカ人の対応 (response) と関与 (involvement) の研究も重要であつた。とくに植民地支配に関する研究はさまざま角度から重ねられてきたが、アフリカ人の経験の歴史的研究にはなお究明すべき課題は多い。これについては、植民地を有した旧宗主国側のアーカイブはもとよりアフリカ諸国のアーカイブに収められてきた諸資料からアフリカ人の歴史的経験を捉えることが一層求められる。(Mungazi 1996, 栗本・井野瀬 1999, 井野瀬・北川 2011)

アフリカ人の日々の暮らしは宗教と密接に結びついている。今日にいたるまでアフリカ人の宗教システム (African religious system) の歴史研究にはさまざまな研究成果が現れている。アフリカニスト史家がアフリカの宗教という課題に取り組むとすれば、人類学、民俗学、キリスト教ミッションの諸研究に依拠するだけでなく、アフリカ人社会の宗教概念や宗教組織の構造、さらには宗教と政治システムの関係性の変化について研究の深化がいつそう求められる。(阿部・小田・近藤 2007, 落合 2009)¹⁴⁾

このような研究と並んでアフリカの文化史 (intellectual and cultural history) も殊の外重要なテーマである。アフリカの文化や思想の歴史的研究 (historical studies of ideas) については、研究成果を蓄積するには困難な面もあるが、アフリカの宗教の歴史的研究と同様に重要なものであることは間違いない。(Mudimbe 1988, 1994)¹⁵⁾

アフリカ人はヨーロッパ諸国の植民地支配の下で黙っていたわけではない。アフリカ人の「初期抵抗」 (primary resistance) 運動と後のナショナリズム運動の連続と非連続の問題は明らかにアフリカ史の一つの重要なテーマである。大きな抵抗が起こり、それと結びついて生じたアフリカ人社会の変化の問題も同様である。また、なぜあるアフリカ人社会は抵抗し、別の社会は抵抗しなかったのか、「抵抗」の結果と「協力」の結果とでは何が異なつたのか、これらも興味深い問題である。少なくともアフリカ人の抵抗の研究を19世紀と20世紀におけるアフリカ史、アフリカ社会のダイナミズム、アフリカ人の生存の政治学を理解する方法として活用する研究が進展してきたように思われる。(Ranger 2013)¹⁶⁾

以上の点からアフリカ史研究には政治学、社会学および経済学などの社会・人文諸科学と

の対話ないし共存がますます必要となっていることがわかる。アフリカ史研究において取り上げられるテーマによっては、このような学際的あるいは異分野横断的な研究は決定的に重要な役割を演じるであろう。近年台頭してきた「開発研究」(development studies)においてアフリカニストの歴史家たちも、新たな資料と異なるアプローチで政治学者や経済学者が議論してきた問題を検討し、開発史(development history)を舞台にしてそれぞれの研究成果を交流させるべき時に来ている。(Kitagawa 2016)¹⁷⁾

(2) 国際アフリカニスト会議における決議

1962年の第1回国際アフリカニスト会議で行われた決議の中にアフリカ史の研究を推進するうえで関わりのある重要な事項が含まれていた。すなわち、この会議ではアフリカ史研究の主流化を進めるために制度的枠組や情報基盤をどのように整備するか、その取り組みが示されていたのである。

第1回国際アフリカニスト会議の報告書によれば、次のようなことがわかる。アフリカ史研究の史料集の出版と翻訳は国際学術連合(Union Académique Internationale, International Academic Union)のイニシャティブによって行われてきたが、この会議では記述史料だけでなく、非文字資料も資料として編纂されることが期待されていた。というのは、口頭伝承(oral tradition)はアフリカの歴史と文化の形成には不可欠な資料群を形成していると考えられたからである。しかし、当時においても、これらの資料は新旧の世代交代の中で消滅の危険にあると危惧されていた。したがって、口頭伝承の収集は緊急の事業であり、高い優先順位が与えられねばならなかったのである。(Bown and Crowder 1964)¹⁸⁾

また、1967年12月にダカールで開催された第2回国際アフリカニスト会議でも、歴史学部門分科会では次のような最終決議が行われた。ユネスコで作成されたアフリカ史刊行計画と、ユネスコが主催したニアメとバマコでの会議の成果に基づいてアフリカの大学及び研究機関の援助によるアフリカ史刊行計画の遂行を国際アフリカニスト会議に委託するようにユネスコに対して要請が行われたのである。それと同時に、アフリカ大陸史の編纂と歴史教育とに役立つ史料集の発行が決定された。この決定に基づいて先史時代、古典古代、奴隷貿易と植民地時代、口頭伝承、アフリカ史の方法論に関する史料集の発刊を準備する専門家グループをアフリカニスト会議内に発足させることが提案された。このようなアフリカ史の編集出版および史料集の発刊を進めるための制度的基盤として、アフリカ大陸の各地域に、アラビア語圏アフリカ研究施設、西アフリカ研究施設、中央アフリカ研究施設、南アフリカ研究施設などの諸機関の設置が要請された。¹⁹⁾

また、第2回国際アフリカニスト会議のアラビア学小委員会でも、歴史部門の提案をうけ

て、史料の塊集、史料目録の発行、アラビア語史料の翻訳の計画が検討された。アフリカニスト会議に先立って1967年11月30日から12月7日にかけてマリのトンブクトゥで UNESCO は「アフリカ史史料の利用についての専門家会議」を開催しており、その動きと連携することが検討された。この分野の研究を専門にしている大学や研究所—セネガルではダカールのブラック・アフリカ基礎研究所（Institut Fondamental d'Afrique Noire, I.F.A.N.）、ナイジェリアではイバダン大学のアラビア学科—においても、アフリカの各地方の諸研究を集約する必要があると指摘された。さらに、将来、アフリカ諸国の各大学と研究所は、北アフリカに関してはラバト大学に、フランス語圏アフリカに関してはダカールの I.F.A.N. に、英語圏アフリカについてはイバダン大学に、東アフリカについてはハルツームかダルエスサラームに設置される研究所に、塊集した史料のリストを集約することで情報基盤を構築できると考えられていた。²⁰⁾

3 アフリカ史研究の「主流化」の試み—UNESCO における「アフリカ史」と「人類史」のプロジェクト

(1) 『アフリカの歴史』 (*General History of Africa*) プロジェクト—第1フェーズから第2フェーズへ—

1964年に開始された『アフリカの歴史』 (*General History of Africa*、以下GHA) の出版にむけた取り組みの狙いは、新興の独立アフリカ諸国の願望、すなわち自らの歴史の非植民地化 (decolonization) と自らの過去に関する言説の再認識にあった。39人の専門家からなる国際科学委員会 (International Scientific Committee) —そのうちの3分の2はアフリカ出身者—の下で、多様な地域出身の約350人の執筆者、翻訳者、および各巻の編者は35年以上にわたってともに仕事を続け、その成果は英語、アラビア語、フランス語等の8巻のGHA シリーズにまとめ上げられた。²¹⁾

この事業は、ヨーロッパ中心史観 (euro centrist vision of history)、人種偏見、およびアフリカ人に対する常套句 (usual cliché) に挑戦し、アフリカの文化と文明の先行性 (anteriority) と創造性を確立するものであった。このシリーズは、歴史学や言語学をはじめとして美術 (fine arts)、舞台芸術 (performing arts)、音楽などの人文科学だけでなく、社会科学の各分野を含めて自然科学にいたる多くの学問分野の成果に基づくものであった。執筆者たちは、記述文書、考古学資料、オーラル資料および口頭伝承などに依拠しながら、多様な方法論を導入し、アフリカ人の歴史的パースペクティブを提示することで、人類の一般的な進歩の歴史に対するアフリカ人の貢献に光をあてていった。GHA は、アフリカ史学

史に大きな貢献をなしたものと考えられる。たとえば、それは、アフリカを全体として見ることで、北アフリカとサハラ以南アフリカの二分法（dichotomy）を退けることができたところにもあらわれている。

しかし、今日においても、GHAは広く流布しているわけではなく、十分に利用されているわけでもない。アフリカ諸国の多くの学校で使用されている歴史の教科書は、このシリーズの刊行に際して強調された政治的あるいは教育的コミットメントに十分には対応していない。アフリカ諸国におけるアフリカ史のカリキュラムと教科書は、現在でもヨーロッパ中心主義（euro-centrism）に侵されているとの批判がある。他方、アフリカ諸国の中にはカリキュラムがナショナリズムの色濃い歴史教育へ向っている国もあり、歴史教育の懸念材料になっている。このような狭隘な歴史観ではアフリカの人々の間の幅広い交流史や共通の歴史的遺産が見失われてしまいかねない。アフリカがこれまでアフリカの人々の文化、共通の遺産および価値観に基づいて地域統合や持続的発展を目指してきたことをないがしろにするわけにはいかないであろう。したがって、歴史教育の革新（renovation）は緊急性の高い新課題と言える。若いアフリカ人には、自らの過去の遺産、運命、誇りの感覚を伸ばす教育が求められる。そうすることで若者は、自らの運命を動かし、大陸の運命をも掌中に収める能力を育むことができるであろう。

このような目的を達成するためには、紛争と飢餓に支配された貧困の大陸というアフリカの負のイメージに挑戦すること、表れ方に差異はあるが共通の根をもつアフリカ文明とそれが人類の進歩に貢献してきた歴史に目を向けて、その史実を広く訴えることが重要である。

アフリカにおける歴史教育のカリキュラムと教科書を UNESCO の GHA に準拠して開発する過程で国連に加盟するアフリカ諸国が自らイニシアティブを発揮していこうとして生まれたのが GHA の新しいフェーズへの運動であった。これは、2009年に GHA の第2フェーズとして「*General History of Africa* の教育的活用プロジェクト」（Pedagogical Use of the General History of Africa, PUGHA）を実施しようという決議につながっていった。²²⁾ PUGHA の目標は、GHA を活用して、アフリカにおける歴史教育を刷新することである。とくにアフリカの人々の共通の遺産に焦点を当てることによって、相互理解、地域統合、平和構築を支援し、アフリカに暮らすアフリカ人と世界の他の地域で暮らすアフリカ人の祖先をもつ人々との間の絆を強くすることができるというのである。

このプロジェクトでは、以下の目的が定められた。① GHA に準拠して3つの共通のコンテンツ（カリキュラムの概要、教員の指針、学校用の教科書）を3つの年齢集団（12歳未満、13～16歳、17～19歳）のために精緻なものとする。②アフリカ史研究の最新の成果、方法論の進展、歴史教育の方法の革新に照らして教員用の訓練ガイドを開発する。③補助教材

を充実する。たとえば、歴史地図、アフリカ史で使われる専門用語の解説書、各種教育用資料を収めたCDROMの開発が含まれる。④加盟各国は上記のコンテンツを学校教育のカリキュラムに導入できるように解説書を作成し、アフリカ大陸の各高等教育機関はGHAの活用の普及に協力する。⑤アフリカ人ディアスポラに向けたアフリカ史の特別のコンテンツを開発する。⑥GHAに依拠して公式および非公式教育のための教材（フィルム、ラジオ、テレビ、マルチメディア、アニメーション、漫画、子ども用絵本、教育用ゲームなど）を作成する。

GHAの第2フェーズでは、GHAの既刊8巻の内容が精査された。すなわち、全8巻シリーズの完成以後、アフリカ史研究に重要な発展が見られただけでなく、1990年代以降、アフリカとアフリカ人ディアスポラに衝撃を与えた政治、経済、社会、文化、環境の変化は全8巻の内容に再検討を迫るものであったからである。

AUの創設と地域統合のプロセスは、アフリカ大陸の分割と植民地化以降に継承された「アイデンティティ」と「国民」形成のモデルを問い直す新たな事態の展開を示すものであった。1990年代末以降、グローバル化する世界における国際関係の大きな変動は、アフリカにとって新しい機会を開いただけでなく、新たな脅威や課題を突き付けた。急速な都市化、戦略的な天然資源の開発、野心と創造力にあふれた若者の出現は、アフリカに新しい課題を提示し、自らの運命についてオーナーシップを取り戻す必要性を強く意識させるものであった。

さらに、南アメリカ、中央アメリカ、北アメリカ、カリブ海、インド洋、中東およびその他の地域においてアフリカ人の血統をひく人々はアフリカとの絆そしてアフリカの遺産とのつながりを強く求めるようになった。他方、アフリカ人の末裔たちにとって故国として認識されるアフリカ諸国も、自国の社会建設にこうした市民たちの貢献をますます期待するようになっていく。これは、人種主義や過去の不平等に向き合い、歴史の歪みを正すことを目的としたアフリカ諸国の政策の策定がグローバルな広がりで見られることにつながっていく。たとえば、アフリカ史教育を義務化したブラジルのイニシアティブは画期的な試みであった。

現在進行しているGHA第9巻の出版への取り組みは、以上の潮流に対する積極的な対応であり、2009年にリビアのシルトで開催されたAUの加盟国会議で下された決議EX.CL/520(XV)に対する対応でもあった。すなわち、それは「脱植民地化以降の最近の歴史、アパルトヘイトの終焉、世界におけるアフリカの位置を網羅するGHA第9巻」のドラフトの作成に深くかかわるものであった。

第9巻刊行の目的は次のように示されている。

「すでに刊行されたGHA 8巻シリーズに含まれている学知をアップデートする。多様な領域にわたる科学研究の最新の発展に照らして、また、シリーズ第8巻の出版以降アフリカ大陸で生じた政治、経済、社会、文化、生態の変化に照らして内容を刷新する。アフリカ人ディアスポラと彼らの多様な貢献、とくに近代社会の建設とアフリカ大陸の解放と発展に対する貢献について分析する。アフリカ人ディアスポラに関しては、古代世界のさまざまな地方におけるアフリカ人のプレゼンスに関する新しい学問的発見、奴隷貿易時代のアフリカ人の追放、植民地期と独立後のアフリカ人の移動が考慮される。」²³⁾ このように第9巻の刊行にあたっては、2013年に国連総会によって提言された「アフリカ系人の10年」(International Decade for People of African Descent)への重大な貢献を意図し、冷戦とアパルトヘイトの時代の後に生じた諸変化だけでなく国際的に記憶されるべき顕著な事態の展開をアフリカ系人のパースペクティブから分析することの重要性が強調されている。

OUA 創設50周年記念の機会にアジスアベバで専門家会議が組織された。この会議では、上に述べた問題への取り組み方と第9巻の精緻なガイドラインが定められた。この会合にはアフリカおよび世界各地の多様な学問的背景をもつ35~40人の専門家が集合した。各専門家たちは最近の科学的研究の発展とアフリカとアフリカ人ディアスポラの学知に対する大きな貢献を研究し、1990年代以降アフリカで生じた大きな事件、アフリカ大陸の人々の直面した新たな脅威、機会および課題に対する認識を共有した。とりわけ、世界の多様な地域の動向に照らしてアフリカ人ディアスポラ概念や定義を再検討し、今日、彼らが直面している課題を同定するとともに、第9巻の内容を精緻化するために明確なガイドラインを設定していったのである。²⁴⁾

(2) UNESCO『人類の歴史』プロジェクトに見られるアフリカ史の位置

UNESCO 憲章前文には、次のように設立の目的が記されている。「当事国は、世界の諸人民の教育、科学及び文化上の関係を通じて、国際連合の設立の目的であり、かつ、その憲章が宣言している国際平和と人類の共通の福祉という目的を促進するために、ここに国際連合教育科学文化機関を創設する。」以上の理念に照らしてUNESCOでは、人間が、個人としても集団としても人類の文化と科学の発展をどのように認識してきたのか、その歴史を描くためにこれまで2回にわたって人類史の刊行が企画された。

第1は、*History of Mankind: Cultural and Scientific Development* シリーズの企画であった。²⁵⁾

この企画は、1947年、メキシコシティで開催されたUNESCO総会の第2セッションで提起された決議に始まるが、それは、UNESCO準備委員会のジュリアン・ハクスレー (Dr.

Julian Huxley) の発案によるものであった。

1947年以降、数回にわたって開催された準備会合の参加者は、カール・ブルクハルト (Professor Carl J. Buruckhardt)、ルシアン・フェーブル (Lucien Febvre)、ジョセフ・ニーダム (Joseph Needham)、ジュリアン・ハクスレー (Dr. Julian Huxley) などであった。1949年の UNESCO 総会では、ルシアン・フェーブルとミゲル・オゾリオ・デ・アルメイダ (Miguel Ozorio de Almeida) の報告に基づいて本事業の着手が承認された。同年、専門家委員会が設置され、計画のドラフトを準備することになった。本委員会にはシアカ (R. Ciaca)、フェーブル (L. Febvre)、フローキン (M. Florkin)、ニーダム (J. Needham)、ピアジェ (J. Piaget)、リヴェット (P. Rivet)、シュリオック (R. Shryock) などが参加した。1950年には UNESCO 総会の決議に基づいて、この企画を推進するために国際学術連合会議 (International Council of Scientific Union、1998年に名称が変更され、現在は国際科学会議 International Council for Science, ICSU) と国際哲学・人文学会議 (International Council of Philosophy and Humanistic Studies) との協議を経て、国際委員会 (International Commission) の設置が承認された。本委員会のメンバーには、ホイ・ババ (Professor Hoi BhaBha, University of Bombay)、カール・ブルクハルト (Carl J. Burchhardt, Switzerland)、パウロ・ド・ベレド・カルネイロ (Paulo E. de Berredo Carneiro, University of Brazil)、ジュリアン・ハクスレー (Julian Huxley, UK)、ヴァール・モルゼ (Vharles Morze, University of Paris)、マリオ・プラズ (Mario Praz, University of Rome)、ラルフ・ターナー (Ralph Turner, Yale University)、シルヴィオ・ザヴァラ (Silvio Zavala, University of Mexico)、コンスタンチン・ズライク (Constantine K. Zurayk, University of Damascus) が就任した。

1950年12月と1951年3月に開催された国際委員会では、企画協力委員 (Correspondence Members) が任命され、さらに編集委員会 (Editorial Committee) が設置された。ラルフ・ターナーが編集委員長に就任した。1952年～1954年の間に国際委員会にはディクステルホイス (Professor E. J. Dijksterhuis, Netherland) を含む10名が新しい委員として就任した。以降、国際委員会は25名で構成され、委員長のパウロ・ド・ベレド・カルネイロが運営にあたった。²⁶⁾

1954年以降、この国際委員会に事務局が設置された。本シリーズの刊行過程で季刊雑誌『世界史ジャーナル』(Journal of World History) が発刊されている。当初、この雑誌の編集にあたったのは、ルシアン・フェーブルであったが、1956年に同氏が没した後にはフランソワ・クルーゼ (Dr. François Crouze) とガイ・メトロウ (Dr. Guy S. Metraux) が編集を担当している。

次いで、編集委員会の勧告に従って各巻の編集責任者が任命された。第1巻は、ジャケッタ・ホークス（Jacquetta Hawkes）とヘンリ・フランクフォート（Henri Frankfort、同氏の没後は、レオナード・ウーリー（Leonard Woolley）、第2巻は、ルジ・パレット（Professor Luigi Paret）、第3巻は、ルネ・クルーセ（Rene Crousset）、同氏の没後は、ガストン・ヴィート（Professor Gaston Wiet）、第4巻は、ルイ・ゴチャーク（Louis Gottschalk）、第5巻は、ジョルジュ・バサドル（Jorge Basadre）、後にチャールズ・モザレ（Charles Mozare）、第6巻は、ザカリヤ（K. Zachariah）、後にキャロライン・ワレ（Caroline F. Ware）が担当した。また、各執筆者に委嘱された原稿の点検とこの企画に万全を期すために各分野の専門家に助言を求めることとされた。

以上の準備過程を経て、*History of Mankind : Cultural and Scientific Development, Vol. 1*が1963年に刊行された。付表1は、本シリーズ全6巻の全体の構成とアフリカに関する表題と記述について概略を示したものである。本表からわかるように、人類史の時期区分としては、先史、古代、中世、近代、現代と5期に分けて、第1巻を先史時代、第2巻を古代世界、第3巻を中世文明、第4巻を近代世界の形成期にあて、第5巻では19世紀、第6巻では20世紀の前半が充てられている。また、本シリーズの中で、アフリカに関して記述がみられるのは、以下の通りであった。第2部文明の始期においては「社会の都市化」と「宗教的信奉と実践」の項目にエジプトに関する記述があった。第2巻古代世界においては、第1部のBC1200～BC500ではごく簡単なアフリカに関する記述、第2部のBC500～キリスト教時代と第3部のキリスト教時代の始期からAD500にエチオピアの宗教に関する記述がみられた。第3巻中世文明においては、第3部が「アフリカ、南北アメリカ、オセアニア」となっており、ここに「先史時代のアフリカ」から「中世のアフリカ」にいたるアフリカ史の記述が掲載されている。第4巻近代世界の基礎においては、アフリカに関する項目が配置されておらず、まとまった記述は見られなかった。第5巻19世紀においては、第3部の社会、文化および宗教の諸側面の中で「南アフリカとオーストラリアにおける西洋文明」と題する項目の下で「南アフリカの発展」が素描されていた。また、第4部の「ヨーロッパの帝国、科学技術の進歩、文化対立」の中でヨーロッパ文明との接触を扱った項目でアフリカの記述があり、そこでは、アフリカへの科学文明の拡散とそれに対する抵抗について書かれていた。第6巻の20世紀においては、第3部の世界の人々の自画像と願望の下位項目として、人種的優越性の中で南アフリカが、ナショナリズムの台頭の中で新興アフリカ諸国の歴史がごく簡単に記述されていた。

第2は、*History of Humanity : Scientific and Cultural Development*のシリーズである。国際協力の下で「人類の歴史の科学的小および文化的諸側面、人類と文化の相互依存、人類共

通の遺産への貢献について広い理解に供する」ために出版された *History of Mankind: Cultural and Scientific Development* のシリーズが完成したのは1969年であった。同年、第一次国際委員会委員長のパウロ・デ・ベレド・カルネイロは、「我々が書いてきたことが書き換えられる日が訪れるだろう。我々の後継者がこれに関わり、我々が始めた著作の改訂版が新しい千年紀の夜明けに出版されるかもしれない」と語った。

その後、1978年に開催された UNESCO 総会においてこのプロジェクトの継続が決議され、1979年に第二次国際委員会が設置された。前シリーズと同様に出版をめざして組織化がすすめられたが、新シリーズは前シリーズとは異なり、*History of Humanity* と称されることになった。両者は、多様な文化のおよび科学的発展という観点から人類史を編纂するという点では共通しているが、新シリーズは、前者の単なる改訂版ではなく、さらに多様なテーマと広い範囲にわたる地域を網羅している点で異なっている。

『人類の歴史』シリーズが改訂されるにいたった理由としては、1960年代以降の歴史研究の方法の発展に加えて、歴史記述が人類の知識のレベルを引き上げるうえで演じることができるとの役割の変化があげられる。歴史記述の書き直し (rewriting) は、新しい資料やデータが利用可能になったために人類史におけるあらゆる変革の意味づけと評価が変化したことに関わっている。

新シリーズは、「最大限の多様性」(a maximum of diversity) という原則に基づいて構成されることになった。このシリーズの狙いは、「世界の一つの歴史」(a history of the world) を目指しているのであって、「一つのユニバーサルな歴史」(a universal history) を目指しているのではない。ユニバーサリズムは、紆余曲折があっても「一つの統合された世界の一つの歴史」(one history for one united world) の構築に向かう思想運動であるが、このシリーズは人類史の最大公約数 (highest common factor) ではなく、「最小公倍数」(the lowest common multiple) に向けて編成されることになった。

新シリーズの刊行はジョルジュ・アンリ・デュモン (George Henri Dumont、ベルギー) を委員長とする国際委員会の下で進められた。30名から構成される国際委員会のメンバーの中でアフリカ出身の委員は、ボニー (J. Bony, コートジボワール)、キ・ゼルボ (J. Ki-Zerbo、ブルキナファソ)、ムボコロ (E. M'Bokolo、ザイール)、ンケイタ (T. N'keita、ガーナ)、オベンガ (T. Obenga、コンゴ)、オゴト (B. A. Ogot、ケニア) の6名であった。また、10名の委員によって事務局が設置され、その中にティアム (I. D. Thiam、セネガル) が入っていた。

新シリーズの編集にあたっては、国際委員会と編集委員会で多岐にわたる議論が展開されたが、最終的には、7巻構成とし、各巻にはそれぞれ一つの時期を割り当て、テーマを論じ

る部と地域の歴史と現状を説明する部の2部構成とされた。また、ローマ帝国のキリスト教化を古代の終わりとするヨーロッパ史の伝統的な時期区分(western traditionalism)に準拠することには疑問が提起され、ムハンマドの遷都(Hegira)を重要な歴史の変わり目として位置づけるなどの工夫が行われた。そこで、まず、16世紀から17世紀の大航海時代(grand discoveries)を人類史(あるいは世界史)の大転換期と考え、これに1巻を当てることにした。その時代に続く歴史に2巻(19世紀と20世紀)、それに先立つ人類の誕生から16世紀までの歴史に4巻を当てることにしたのである。すなわち、その構成は、第1巻を先史時代と文明の始期、第2巻を紀元前第3千年紀から紀元前7世紀、第3巻を紀元前7世紀から紀元後7世紀、第4巻を7世紀から16世紀、第5巻を16世紀から18世紀、第6巻を19世紀、第7巻を20世紀にあてることとなった。

*History of Humanity*の各巻の責任編集者は以下の通りである。第1巻の「先史時代と文明の始期」は、ド・ラエ(S. J. de Laet、ベルギー)が編集を担当し、共編者としては、ダニ(A. H. Dani、パキスタン)、J. L. ロレンゾ(J. L. Lorenzo、メキシコ)、ムノー(R. B. Munoo、ガーナ)が任命された。第2巻の「紀元前第三千年紀から紀元前7世紀」では、ダニとモーエン(J. P. Mohen、フランス)が編集を担当し、ロレンゾ、マッソン(V. M. Masson、ロシア)、オベンガ(T. Obenga、コンゴ)、サケラリオ(M.B. Sakellariou、ギリシャ)、タパール(B. K. Thapar、インド)、ザン・チャン・ショウ(Zhang Chang-Shou、中国)が共編者となった。第3巻の「紀元前7世紀から紀元7世紀」では、ヘルマン(J. Herrmann、ドイツ)とズルシャー(B. Zurcher、オランダ)が編集を担当し、ハルマッタ(J. Harmatta、ハンガリー)、ロニ(R. Lonis、フランス)、オベンガ、タパール、ゾウ・イ・リャン(Zhou Yi-Lian、中国)が共編者となっている。第4巻の「7世紀から16世紀まで」の編集は、アル・バキット(M. A. Al-Bakhit、ヨルダン)、バザン(I. Bazin、フランス)、シソコ(S. M. Cissoko、マリ)、カメル(A. A. Kamel、エジプト)が担当し、アシモフ(M. S. Asimov、タジキスタン)、ギエイストール(A. Gieysztor、ポーランド)、ハビブ(J. Habib、インド)、カラヤノプロス(J. Karayannopulos、ギリシャ)、キトヴァクとシュミット(J. Kitvak / P. Schmidt、メキシコ)が共編者となった。第5巻の「16世紀から18世紀まで」の編集を担当したのは、バーク(P. Burke、イギリス)とイナルク(H. Inalck、トルコ)であり、ハビブ、キ・ゼルボ(J. Ki-Zerbo、ブルキナファソ)、草光俊雄(日本)、マルティネス・ショー(C. Martinez Shaw、スペイン)、チェルニヤク(E. Tchernjak、ロシア)、トラブルス(E. Trabluse、メキシコ)が共編者として協力している。第6巻の「19世紀」については、マサイアス(P. Mathias、イギリス)とトドロフ(N. Todorov、ブルガリア)が編集を担当し、ムジャヒド(S. Al Mujahid、パキスタン)、チューバリアン(A. O.

Chubarian、ロシア）、イグレスィアス（F. Iglesias、ブラジル）、サックレー（A. Thackray、アメリカ合衆国）、ジ・シュー・リ（Ji Shu-Li、中国）、ティアム（Iba Der Thiam、セネガル）が共編者となった。第7巻の「20世紀」の編集にあたったのは、ブラスウエイト（E. K. Brathwaite、バルバドス）、ゴーパル（S. Gopal、インド）、メンデルゾーン（E. Mendelsohn、アメリカ合衆国）、ティクヴィンスキー（S. L. Tikhvinsky、ロシア）であった。ティアム、ウェインバーグ（G. Weinberg、アルゼンチン）、タオ・ウェンハオ（Tao Wenhao、中国）が共編者になっている。

History of Humanity 全7巻の各巻の構成と概要は付表2に示した通りであるが、各巻ともにアフリカ史に関する記述が前シリーズと比較して格段に増加していることがわかる。各巻の地域セクションでは、それぞれの時代におけるアフリカの各地域の歴史が詳細に記述されている。第2巻では、記述史料の利用可能な地域の歴史としてナイル渓谷、とくにエジプトとヌビアの歴史、考古学および人類学の史料が利用できるナイル渓谷以外の地域の歴史が取り上げられている。第3巻では、紀元前7世紀から紀元7世紀までの北アフリカとサハラ以南アフリカの歴史が描かれている。サハラ以南については西、中央、東アフリカの各地域に分けて論じられ、それにアクスム期のエチオピアの歴史が描かれている。7世紀から16世紀を扱った第4巻では、世界をグレコローマン世界の継承地、ヨーロッパ、イスラーム世界とアラビア語地域、アジア世界、アフリカ大陸、南北アメリカ、オセアニアと太平洋との地域区分がおこなわれ、アフリカに関しては、西アフリカ、エチオピア、東アフリカとインド洋諸島、中央アフリカと南部アフリカに分けられ、それぞれの地域について人々の経済、社会、政治、宗教、文化等に関する興味深い記述が展開されている。第5巻では、16世紀から18世紀の時代が扱われ、この時代の世界を西ヨーロッパ、東・中央ヨーロッパ、ロシア、南東ヨーロッパ、オスマン帝国、アラブ地域、イラン・アルメニア・グルジア、中央アジア、南アジア、東南アジア、中国、日本と韓国、チベット文化地域、北アメリカ、ラテンアメリカとカリブ諸島、アフリカ、オセアニアに分けて論じている。アフリカ史は、経済と社会、政治構造、文化の各分野の歴史に分けたうえで、各分野の中でそれぞれの地域について記述されるスタイルがとられている。19世紀を対象とした第6巻では、ヨーロッパ、北アメリカ、ラテンアメリカとカリブ、西アジアと地中海アフリカ、サブサハラアフリカ、オーストラレシアと太平洋という地域区分が採用された。また、サブサハラアフリカは、フランス支配下のアフリカ、ドイツとイギリスの支配下の西アフリカと中央アフリカ、ベルギーとドイツの支配下の中央と東アフリカ、ポルトガル語圏アフリカ、南部アフリカ、東部アフリカ、インド洋アフリカというような興味深い区分が行われている。最後に、第7巻は、20世紀全般を扱っているが、各種のテーマを扱ったセクションで、国際秩序の形成や伝統的ないし在

来の知識の活用の項目にアフリカに関する記述が見られ、また、社会・人文科学（歴史学、人類学、考古学、人口学、社会学、経済学、法学、政治学、言語学、地理学）におけるアフリカを対象とした研究の記述が見られた。また、アフリカ史は、西アジアとアラブ世界、サブサハラアフリカという地域区分のなかで記述されていた。²⁷⁾

多くの観察者の目から見れば、UNESCOは、第二次世界大戦後、新たに世界を造りなおそうという高貴な夢を具体化しようとしてきた。UNESCOは、もともと20世紀中葉のリベラリズムのプロジェクトの一部として立ち現れたものであった。すなわち、新しい普遍的精神の中に戦後の国際関係を再定置するというものであり、その特徴的な「文化的国際主義」(cultural internationalism)は1945年以後の「新グローバリズム」を導入するのに役立てようという意図があった。UNESCOのアジェンダは野心的なものであった。すなわち、国連の世界事情に対する実験的な介入活動を強化し、豊かにし、補うことであった。国連に「魂」を吹き込みことであった。UNESCOは、「ソフトパワー」でそれを行おうとした。すなわち、異文化の理解、一般教育、当時「世界文明」と明確に呼称されていたものに対する新たな国際的確認を通じて国際平和を促進し、広げようという目的であった。戦後、半世紀以上を経て、UNESCOは、その光彩を失ったかもしれないが、戦後の短命であった国際主義時代以降、存続してきたことは明らかであり、今もなお、グローバルな平和と異文化間理解の「文明化の使命」をもってさまざまな方面に活動を続けていることは確かである。

しかし、UNESCOの歴史は、比較的学問上の関心を引くこともなく、典型的には、戦争直後のロマンティズムの古風な遺産として見過ごされてきたが、近年、こうした態度は変化し始めた。というのは、UNとその関連機関が学問的関心の高まりを享受するようになったからである。こうした動向は、戦後のトランスナショナリズムのルネサンスを跡付けようという意識によって大いに推進されてきたところがある。考えてみれば、UNESCOは、戦後、ポスト・ファシスト期の国際主義の新しい世界を具現しようとしたものであり、そこでは礼節と知識と文化の交流が、時代の制約があったにせよナショナリズムと偏見と暴力に代わるものとして考えられていた。しかしながら、UNESCOは、国際社会の新たな現在と未来を構築することに関心を持っただけでなく、過去ともかかわらねばならなかった。すなわち、UNESCOにとって当初からグローバルな遺産(global patrimony)の保存事業はその活動の中心をなし、最も初期のUNESCOのプロジェクトは世界中いたるところに存在する古くからの文化的遺跡の保存であった。周知のごとく、これは、現在でも変わることなく続けられている事業である。

これと比較すれば、ほとんど知られていないプロジェクトとして、UNESCOは、また、第二次世界大戦のもたらした死滅と破壊から生まれてきた世界のために新たなグローバル・

ヒストリーを書こうとする壮大なプロジェクトにかかわっていたことを忘れてはいけない。それは、本稿ですでに触れた二つのプロジェクト、すなわち、*History of Mankind* と *History of Humanity* の人類史の刊行であった。UNESCO の人類史プロジェクトは、いくつかの点で注目できる。第一に、このプロジェクトは、ヘロドトスの時代にまでさかのぼることができる歴史記述のスタンダード—戦争、偉人、政治上の出来事の歴史—から決別し、世界史を平和と進歩の物語として書こうと意識的に努力したことがあげられる。第二に、このプロジェクトは、啓蒙時代のプロジェクトのある意味では最新版であった。科学と技術の解放をもたらす力を基礎にしたユニバーサルな歴史をもとめて百科全書の願望で完成させようとした。第三に、この世界史プロジェクトは、19世紀からの出発でもあった。すなわち国民国家と国家形成を歴史記述の中心から取り除いただけでなく、科学や技術にアクセントを置くことで物質主義の歴史（マルクスの唯物史観とは異なる）を描こうとした。第四に、UNESCO の人類史は、世界史の主人公としてのヨーロッパを相対化しようという試みでもあった。それが、どれほど成功しているかはにはわかには判断できないにしても、“equality in diversity” モデルの歴史を書こうとしたことは明らかであった。（Betts 2015）²⁸⁾

4 経済史研究におけるアフリカの「主流化」

社会科学におけるアフリカの主流化に関する一事例として経済史研究の新たな展開について概観しておきたい。近年、アフリカ経済史の研究をめぐるさまざまな議論が現れている。それらの動向は「ルネサンス」、「前進」、「国際化」と称されているが、この動向を振り返ってみることで、経済史研究におけるアフリカの主流化の問題を具体的に考えてみたい。

たとえば、世界におけるアフリカ経済史研究を牽引しているギャレス・オースティン（Gareth Austin）は、次のように述べている。

「アフリカ経済史研究の最近の動向を示す一つの動きとして、2012年9月にジュネーブの国際関係研究大学院において『アフリカ経済史の新しいフロンティア』（New Frontier in African Economic History）という国際会議が開催された。この国際会議には、アフリカに関する研究において卓越した地位を確立してきた研究者だけではなく、新たな世代に属する新進気鋭の経済史家が一堂に会した。この会合は、まさにアフリカ経済史研究の『ルネサンス』（renaissance）を象徴するものであった。これは、近年、高まりを見せているアフリカ経済史研究の潮流の中で行われたものであり、アフリカ経済史研究の『再生誕』（rebirth）を支えるもっと広範な学問的潮流を象徴するものであった。」（Austin and Broadbury 2014）この会議は、第1に、過去50年間のアフリカ経済史研究の盛衰を回顧し、第2に、アフリカ

経済史研究の成果が経済史研究の主流から離反した理由を考察し、第3に、現在のアフリカ経済史研究の主要な動向を展望し、第4に、どのようにすればアフリカ経済史研究が経済史研究の主流と結合するための障害が克服されるか、を検討する機会となった。²⁹⁾

また、このようなアフリカ経済史研究の注目すべき動きとして、研究方法と研究資料のギャップを埋めようとする試みが見られる。アフリカ経済史の研究が復活（resurgence）しつつある今日、この分野の研究に関わる方法論、概念、および研究課題を今一度展望しておく必要がある。ところが、多様な方法論に基づくアプローチは、分裂（divide）を招く可能性も否定できない。たとえば、計量的アプローチを基本とする立場と質（定性）的ないし叙述的アプローチに軸足を置く立場の対立がある。このような問題の相互理解を深めるために、最近形成された「アフリカ経済史ネットワーク」（African Economic History Network）は、方法論と資料論の間のギャップを橋渡しし、アフリカ経済史研究について広い範囲にわたる学問的交流を促進することを主眼としている。³⁰⁾

ところで、アフリカ経済史研究の「復活」は、発展途上地域に関する経済史研究の新展開と密接な関係がある。そのような潮流を如実に示す一つの実例がある。かつて南アフリカ経済史学会（Economic History Society of South Africa、1980年創立）によって刊行されていた学会誌『南アフリカ経済史ジャーナル』（*South African Journal of Economic History*）が、2010年以降、『開発途上地域の経済史』（*Economic History of Developing Regions*）と改称され、アフリカをはじめとする発展途上地域の経済史研究のイニシアティブをとる雑誌に刷新された。これまで『南アフリカ経済史ジャーナル』はスチュアート・ジョーンズ（Stuart Jones）によって編集されてきた。同氏は、1987年から2009年にいたるまでのほとんどの期間にわたってジョン・イングズ（Jon Inngs）とともに編集長として重要な役割を演じてきた。（Verhoef 2020）ジョーンズの退職にともなって、ステファン・シャーマー（Stefan Schirmer）が編者に就いて以降、編集方針が根本的に変更され、本学会誌の取り上げる範囲は著しく広がった。というのは、発展途上地域を代表する専門家によって編集チームが組織され、雑誌のレベルとクオリティを維持することはもとより、当該分野の国際的な研究に関する議論にアフリカ経済史家の貢献する範囲を広げることができたからである。³¹⁾

『開発途上地域の経済史』は、アフリカ、アジア、ラテンアメリカ、中東を含む発展途上にある南の地域（developing South）の経済変化の研究を促進し、工業化している北（industrializing North）をこえた経済発展の歴史を探求する革新的な研究（innovative research）の場を提供しようとしている。また、この学会誌は、計量的な（quantitative）方法あるいは質（定性）的な（qualitative）方法のいずれかに基づく論文だけでなく、両者のアプローチを組み合わせた論文も受け入れる。この学会誌は、ジェネラル・ヒストリー、

クリオメトリクス、経営史、労働史、金融史、開発研究等の多様な学問研究の立場から経済史に焦点をあてた研究成果の成長を求めている。こうした試みがアフリカをはじめとして世界の発展途上地域における経済史研究をいっそう強化し、さらに新たな次元の成果を開くことになるであろう。³²⁾

経済史研究においてアフリカの主流化を進めていく上で直面している二つの重要な課題があったことを確認しておきたい。

第1は、『アフリカ史ジャーナル』(*Journal of African History*)に掲載されたホプキンズ(A.G.Hopkins)の論文“The New Economic History of Africa”(*Journal of African History*, 50-2, 2009.)と『開発途上地域の経済史』に掲載されたジェームズ・フェンスケ(James Fenske)の長大な論文“The Causal History of Africa: A Response to Hopkins”(*Economic History and Developing Regions*, 25-1, 2010.)をめぐる論争である。³³⁾

両者の論争についてモルテン・イェルウェン(Morten Jerven)は、“A Clash of Discipline? Economists and Historians Approaching the African Past”と題する論考の中で次のように書いている。「この論文は、アフリカの過去における社会的および経済的変化を解釈するときに、経済学者と歴史家によってとられるアプローチの違いを検討している。一つの学問が他の学問に覇権をとらえ、独占するというような想定は誤りである。たとえば、アフリカの貧困の歴史的原因を評価しようとする場合を考えてみよう。『新アフリカ経済史』(*New African Economic History*)の欠点の一つは、データの質の問題をまったく脇に追いやっているということである。学問横断的な研究(学際的な研究)において一般的に言われていることは、データの時点と観察が他の学問の知識の状態と一致すべきであるという点である。もし経済学者(エコノミスト)が歴史的議論の「強固さ」(robustness)について考える唯一の基準がエコノメトリックの方法に固執することであるとすれば、彼ら自身が不適切(disservice)と言わざるをえない。」(Jerven 2011, 2015 イェルウェン 2015)

これに対してフェンスケは、同じ号に“The Causal History of Africa: Replies to Jerven and Hopkins”という論考を寄せて、自らの論文(“The Causal History of Africa”)に対するイェルウェンとホプキンズの見解に回答している。「同意できるのは、非エコノメトリクスのアプローチに価値があること、データの質が問題であること、歴史の圧縮が良いことではないこと、である。しかし、歴史家はエコノミストの研究技法を退けるべきではないし、不完全なデータを見捨てるべきではない。わずかな実例からでも注意深い推論を重ねるべきである。エコノメトリクスにもとづく問題の同定は非計量的研究の指針となるべきである。」(Fenske 2011)

第2は、経済史研究の国際化あるいは経済史研究の国際市場におけるアフリカ人経済史家

の成果の可視化をめぐる議論である。この議論の契機となったのは、『開発途上地域の経済史』誌上に発表されたジョン・フーリエ (Johan Fourie) とレイ・ガードナー (Leigh Gardner) の論文 (“The Internationalization of Economic History: A Puzzle”) であった。この論文で両氏は次のような趣旨の議論を展開した。経済史研究の国際化はいたるところで見られるが、世界において経済史のトップジャーナル（たとえば、*Journal of Economic History*, *Explorations in Economic History*, *Economic History Review*, *European Review of Economic History* の4雑誌）における発表論文の最新のデータセットによれば、「近年のように経済史研究の国際化が大いに進展しているにもかかわらず、なぜアフリカ諸国を含む発展途上諸国に関する論文、あるいは発展途上諸国からの論文の投稿が相対的に少ないのか。」「発展途上国の課題をテーマとする論文や発展途上諸国の著者による論文に不利な偏見があるようには思われたいし、発展途上国に関する論文や当該諸国の著者の引用に関する分析でもパフォーマンスが比較的悪いというわけでもなかった。われわれの理解では、発展途上国出身の著者は、相対的に生産性が低く、トップ・ジャーナルに論文を投稿することは控えて、現地のジャーナルを選択する傾向があるようである。」(Fourie and Gardener 2011)

しかし、こうした見解には批判が現れた。エリック・グリーン (Erik Green) とピウス・ニャンバラ (Pius Nyambara) は、同じ『開発途上地域の経済史』誌において次のように論じた。「フーリエとガードナーは、なぜ発展途上国からの論文がトップランクの経済史ジャーナルに掲載されるのが相対的に少ないかと問うている。両氏の疑問をもっと広い範囲の西洋世界やアフリカの諸大学における経済史の発展のなかに位置づける必要がある。懸念されるのは、トップランクの経済史ジャーナルにアフリカ人研究者からの研究成果の掲載が少ないことで西洋世界の経済史家たちがアフリカの諸大学では経済史研究がほとんど生まれていないのではないかと考えてしまわないかという点である。アフリカの諸大学での経済史研究は力強いばかりでなく、アフリカ経済史が他の地域の大学で衰退していたときでさえも活発に行われていた。主要な経済史ジャーナルに可視的なかたちで成果があらわれなかったのは、弱さの表れではなくて、西洋世界における経済史研究の方法論の専門化ないし細分化の進展の結果である。このような方法論の行き過ぎた細分化は地域史研究の孤立化をもたらす危険性があり、むしろ西洋世界の経済史家の方がアフリカ人研究者による研究成果にいつそうかかわるようになればよい。」(Green and Nyambara 2015)³⁴⁾

このような議論と並んで、『開発途上地域の経済史』誌上に “The Global Status of Economic History” と題する興味深い論考がヨルグ・バーテン (Joerg Baten) とジュリア・ムシャリク (Julia Muschallik) によって寄稿された。両氏は次のように述べている。「経済史家の多くは豊かな国に集まっているが、アフリカを含めて開発途上地域にも相当数の研究

者がいる。開発研究（development studies）、開発経済学（development economics）、経済史（economic history）の交流はますます多くの研究成果をもたらしている。したがって、重要なことは開発が中心課題となっている諸地域で経済史研究を強化することである。これに加えて、開発概念や開発研究の言説にアフリカをどのようにして主流化することができるかを考える必要がある。」（Baten and Muschallik 2012）

5 南アフリカにおける歴史研究の新展開

しばしば指摘されてきたように、アフリカ史研究においては、地域間の比較を拒むような地域的例外主義には賛成できないが、かといって各地域の歴史的経験の差異性を認めないというわけにもいかない。また、各地域の歴史的研究の特性を認めるにせよ、世界史全体を理解する方向性を見失ってはいけない。最後に、そのような点をあらためて考えさせるアフリカ史研究の国際的動向と南アフリカにおける歴史研究の動向について検討しておきたい。

第1に、最近では、アフリカ史家にはアフリカの過去をグローバルなコンテクストに位置づけることがますます求められるようになった。

アフリカ史と世界史はそれぞれ第二次世界大戦後の歴史研究の重要なフィールドとなってきた。アフリカ史はアフリカの独立期にあたる1950年代と1960年代に急速に成長してきたが、その時代は、近代化（modernization）思想に支配された時代であった。一方、世界史研究は、1990年代まではゆっくりと発展してきたが、その後、急速に拡大し、グローバル化（globalization）思想の時代になって歴史研究の一つの拠点となっている。アフリカ史と世界史という二つの研究領域では、時間と分析の単位のとりに応じて研究の広がりや多様性が顕著になってきた。したがって、世界史家はアフリカに一層注意を払うべきであるし、アフリカ史家はアフリカの過去をグローバルなコンテクストに位置づけるために多くの課題に取り組まねばならないと言えるであろう。（Manning 2013）

第2に、アフリカ史研究を「トランスナショナル史」の立場で説きおこすことが検討されつつある。最近台頭してきたグローバル・ヒストリーとは少し立場の異なる帝国史ないしトランスナショナル史の立場でアフリカ史を位置づけ、アフリカ史をこの視点から説きなおすべき時期にきている、というのである。「トランスナショナル史」は、ローカルな側面の研究に基盤を置きながら、実に多面的な関心を示す一つの歴史分野として帝国史の旧来の方法とは一線を画している。帝国史はアフリカを「植民地化する側」の歴史の背景として扱っている面がある。もっとも、帝国史に対しては、当該研究にかかわる研究者グループ内部の批判やそれとは異なる方法論に立つ研究者からのさまざまな批判や指摘が行われているが、ま

だ十分には追求されていない面もある。すなわち、植民地化する側と植民地化される側が歴史形成の同等の主体としてまた分析対象として扱われているのか、また、このような両者の二分法では支配と被支配の錯綜する歴史的コンテクストが解明できるのか、というのである。また、アフリカとディアスポラの歴史は、トランスナショナルな歴史研究をめざすものにとって重要なテーマであった。それにもかかわらず、トランスナショナル史には、それが乗り越えようとしている植民地化する側とされる側の間の境界を再生産するリスクを常にともなっているという批判もある。帝国によって「構造化された世界」の中から帝国の外側を考察するために必要なことは、歴史家たちが批判的な理論をすすんで受け入れ、多面的な歴史研究と矛盾しない方法を考えることであろう。(Zimmerman 2013)³⁵⁾

以上は、アフリカ史全体について考えるべき問題を提示したのであるが、翻って、南アフリカ史研究の最近の動向とのつながりについて検討しておきたい。

第1は、近年、南アフリカ史をアフリカ大陸の地域間の多面的な交流とトランスナショナルな循環の中で解明する必要があるという指摘が行われている。グローバル・ヒストリーと世界史に関する最近の論争はヨーロッパとアメリカの学会のみならずアジアの学会においても展開されている。南アフリカでは、ポストアパルトヘイト期の20年間にアフリカ大陸全体にわたって人々と思いのいっそう自由な移動が可能になった。こうして生まれた新しい研究者のネットワークは、アフリカ大陸内の地域間の多面的な交流やトランスナショナルな循環を解明する新しいプロジェクトに火をつけたのである。このような研究の新展開は、南の世界の興隆と一致しており、また、グローバル・サウスを母体として考える新しいスタイルの世界史の構築に機会を提供している。(Hofmeyer 2013)

第2は、南アフリカ史研究自体の視野の拡大が求められるようになったという指摘である。近年、南アフリカ史学会では、南アフリカ（南部アフリカ）史研究をナショナル・ヒストリーの狭い視点からリージョナルな視点へ転換しようという顕著な動きが見られるようになった。(Carruthers 2014)

たとえば、これまで南アフリカ歴史学会の会合はもっぱら国内で行われてきた。ところが、2013年6月27日～29日にハボロネのボツワナ大学で行われた南アフリカ歴史学会の大会は、この学会にとっては初めて南アフリカ国外で行われた会合であった。この大会は、南アフリカの歴史をナショナル・ヒストリーよりももっと広い観点から考え、南アフリカ史学自体の過去と未来を再考する絶好の機会となった。南部アフリカ史学の巨匠ネイル・パーソンズ(Neil Parsons)は、『南アフリカ史学雑誌』(*South African Historical Journal*)の巻頭論文で次のように指摘している。第1に、一つの地域としての南部アフリカとは何か、そしてそれは何であったのか。第2に、南部アフリカ史の研究においてたとえば“ethnicity”な

どの過度に固定化されたカテゴリーを使うことには慎重であるべきである。第3に、Prehistory というような遠い過去を南部アフリカ史に組み入れると共にそれを歴史的文脈のなかで認識する (historicize) 必要がある。第4に、南部アフリカ史を東部アフリカやインド洋の結びつきの中で明らかにすることが重要である。第5に、帝国史や植民地史との顕著な持続的側面を明らかにする。第6に、アフリカ人大衆と近代社会の仲立ちをする “native agency” の歴史的役割に注目する。第7に、南アフリカ史研究のより学問的な活動を広く知らしめるためにはメディアの活用も視野に入れるべきである。(Parsons 2014, Mlambo and Parsons 2019) ³⁶⁾

6 結び

最近、『アフラシア学』を著したアリ・マズルイの主張を踏まえるならば、「アフリカ史研究のアフリカ化」と「グローバル・ヒストリーおよび世界史におけるアフリカ史研究の『主流化』」を推し進めるにあたっては、研究主体としてのアフリカニスト史家はアフリカ史研究の中で取り組むべきものは何かを考える上で次の4つの視点から歴史を描くことが不可欠になるであろう。第1は、アフリカ（人）が自ら持っている在来の文化、スキル、資源をどのように活用してきたのか、すなわち “indigenization” の視点に立った歴史である。第2は、外来のさまざまな要因をアフリカの必要にあわせてどのように活用してきたのか、すなわち “domestication” の視点に立った歴史である。第3は、アフリカが自らの多様性を活かしながら他の世界や地域とどれほど多様な関係を取り結んできたのか、すなわち “diversification” の視点にたった歴史である。第4は、アフリカ史の展開過程においてアフリカ諸地域が同じような発展の水準や状況に置かれている他の地域とどれほど相互に関わり合い、あるいはそれぞれの諸要因が相互に影響を及ぼしあってきたのか、水平的な相互浸透 (horizontal interpenetration) の視点にたった歴史である。アフリカ史研究の新機軸を切り開くうえで以上のようなアフリカ史の諸側面を描くことは、アフリカ（史）の一面だけを描くような、断片化（周辺化）を克服する歴史像を構築する途につながるのではないだろうか。(Mazrui and Adem 2013)

しかし、アフリカ史研究においていずれのテーマを設定して研究するにしても、何にもまして取り組まねばならないのは、優れた歴史（学）研究の確固たる基盤にたってアフリカ史を確立することである。すなわち、「アフリカ史の歴史化」(historicization of African history)こそがアフリカニスト史家本来のめざすべきものである。このことは、当然のことながら日本のアフリカニスト史家も例外ではない。(Ranger, 1965) ³⁷⁾

アフリカ史研究は、歴史学の研究対象の広がりに見られるように、空間と時間の多様な設定とならんで、グローバルな連関性を見ることを課題としなければならない時代に立っている。それ故に、日本人アフリカニスト史家は、世界と世界における日本の位置を十分に認識しながら、世界史およびアフリカ史の研究と教育の世界的運動に対して自覚的にかかわらなければならないであろう。

(注)

- 1) 「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」(国連文書 A/70/L.1に基づく外務省の仮訳) は、2015年9月25日第70回国連総会で採択された。この文書では、17の持続可能な開発目標が掲げられ、そのうち目標4には、「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」と記載されている。これをうけて日本においても持続可能な開発目標 (SDGs) 推進本部の設置が2016年5月20日の閣議で決定され、また、2016年9月8日には持続可能な開発目標 (SDGs) 推進円卓会議の設置がSDGs推進本部幹事会において決定された。「持続可能な開発目標 (SDGs) 実施指針」と「持続可能な開発目標 (SDGs) を達成するための具体的施策」が策定され、8つの優先課題が設定された。①あらゆる人々の活躍の推進、②健康・長寿の達成、③成長市場の創出・地域活性化・科学技術イノベーション、④持続可能で強靱な国土と質の高いインフラの整備、⑤省・再生可能エネルギー・気候変動対策・循環型社会、⑥生物多様性・森林・海洋等の環境の安全、⑦平和と安全・安心社会の実現、⑧SDGs実施推進の体制と手段、である。(http://www.go.jp/mofaj/files/000101402.pdf)
- 2) African Union, *Agenda 2063: The Africa We Want*, April 2015. この文書の中には、「私たちが望むアフリカ」を実現するために7つの目標 (African Aspirations) が挙げられている。①包括的な成長と持続可能な開発に基づいたアフリカ、②汎アフリカ主義とアフリカのルネサンスというビジョンに基づいた政治的に統一された一つのアフリカ、③良きガバナンス、人権尊重、公平さ、法の支配の下でのアフリカ、④平和で安全なアフリカ、⑤ゆるぎない文化のアイデンティティ、共通のヘリテージ、価値観、倫理観をもったアフリカ、⑥女性、若者が主導となったアフリカ人の潜在性を最大限生かし、子供たちを育むような、人間中心の開発を進めるアフリカ、⑦力強く、まとまりがあり、しなやかで、影響力のあるグローバルプレーヤーであり、パートナーとしてのアフリカ、以上である。(http://archive.ac.int/assts/images/agenda2063.pdf)
- 3) 日本の「開発協力大綱—平和、繁栄、そして、一人ひとりのより良き未来のために—」は、2015年2月10日に閣議決定された。地域別重点方針の中のアフリカについては、TICADの枠組みで対応することが記載されている。「アフリカについては、貿易・投資及び消費の拡大を軸に近年目覚ましい発展を遂げるアフリカの成長を我が国とアフリカ双方の更なる発展に結びつけられるよう、アフリカ開発会議 (TICAD) プロセス等を通じて、官民一体となった支援を行っていく。また、特にアフリカで進む準地域レベルでの地域開発及び地域統合の取組に留意する。一方、依然として紛争が頻発する国々や深刻な開発課題が山積する国々が存在することを踏まえ、引き続き人間の安全保障の視点に立って、平和構築と脆弱な国家への支援に積極的に取り組み、平和と安定の確立・定着及び深刻な開発課題の解決に向けて、必要な支援を行う。」(http://www.mofa.jp/mofa/files/000067688/pdf) これに先立って2013年12月17日には、「国家安全保障戦略」が「国防の基本方針について」(1957年5月20日閣議決定)に代わるものとして策定されたことを付記しておく。(http://www.cos.go.jp/jp/siryou/131217anzenhoshou/nss-j.

pdf) 近年、アフリカ進出の顕著な中国は日本と同様に「中国—アフリカ協力フォーラム：」(The Forum on China-Africa Cooperation, FOCAC) を2000年以降開催している。(Taylor 2011) また、インドは「インド—アフリカフォーラムサミット」(India-Africa Forum Summit) を2008年以降、韓国も2006年に公表された「アフリカ開発に向けた韓国イニシャティブ」を契機に「韓国—アフリカフォーラム」を開催している。(『主要国の対アフリカ戦略 (世界・アフリカ)』日本貿易振興機構、海外調査部 中東アフリカ課 2013)

- 4) 日本のアフリカ史の時代区分については、次のように論じられていた。星昭(星 1976)は、「周知の通りアフリカは無文字社会であるため、その歴史の解明は文献学的研究にのみ依拠しえず、殊に植民地化以前の事象については編年的記述がはなはだしく困難であり、従って、アフリカ史における時代区分は他大陸の歴史研究におけるほど容易ではない」と語り、次のような暫定的な時期区分を提案したことがあった。すなわち、アフリカ史を、「(一)「黄金貿易時代」(17世紀まで) (二)「奴隷貿易時代」(17世紀—19世紀初期)、(三)「伝道通商時代」(1870年代末まで)、(四) 植民地的従属時代 (1880年代—20世紀中葉)、(五)「新興独立時代」(20世紀中葉)」の五つに時期区分するものである。(星昭・林晃史 1978) 日本において初めてアフリカの通史『黒い大陸の栄光と悲惨』を書いた山口昌男(山口 1977)は、人類の起源から説き起こし、古代エジプトをはじめサバンナと大湖地方の諸王国について語り、アフリカの「黄金伝説」、奴隷貿易、東海岸の交易都市の繁栄、南アフリカの諸王国の盛衰、ヨーロッパによる植民地化とその過程で生まれた抵抗、そして最後に両大戦間期と戦後の独立への動きを順次記述した。1980年代前半まで、17世紀の奴隷貿易拡大期以前のアフリカは「古王国時代」あるいは「アフリカの古代」と称されるか、または、王国成立の基盤が黄金の王室独占とイスラーム商人との結びつきにあったと考えて「黄金貿易時代」として一括する時期区分が行われた。これに対して川田順造(川田 1993)は8世紀を大きな転機とする時期区分を試みた。すなわち、川田は、アフリカ史を「(1) アフリカ諸文化の基層形成の時代 (人類の始原から紀元後1000年まで)、(2) 大規模な通商国家および都市の発達と、長距離交易を媒介とするアフリカ大陸内部の広範な文化交流の時代 (8世紀から16世紀末)、(3) ヨーロッパ勢力の進出と、それにとまなうアフリカ社会の変動、さまざまな地域における政治的統合の成立 (15世紀後半から19世紀はじめ)、(4) ヨーロッパによる植民地化と、独立後の新しいアフリカへの模索の時代 (19世紀後半から現在まで)」の4期に区分した。宮本正興と松田素二の編著(宮本・松田 2018)においても、イスラームの侵入と奴隷貿易を経て植民地化がはじまるまでの時期を「外世界交渉のダイナミズム」として設定しており、これは、近年のアフリカ史研究の動向を反映したものである。

アフリカ大陸は外見上文化的背景や社会構造に類似性と同質性があり、一つの総体としてとらえることも可能であるが、文化と社会の形態は多様であり、異なる特徴をもつ数多くの小さな地域に区分することも可能である。古くからの固有の内的構造と新たに加えられた外的衝撃との相互作用によって生まれたダイナミズムがアフリカ史を形成してきたとすれば、それを理解する上で一定の共通性をもった地域を区分することは、特定の時間設定の下で地域間比較を行う上で有益であろう。1970年代に出版された『アフリカ現代史』(山川出版社)は、アフリカ大陸の地理的特質に基づいて東、西、南、北、中部の地域ごとの5巻本として出版された。これまで出版されたアフリカ史の概説書の中で興味深い地域区分が行われたものとして宮本正興と松田素二の編著(宮本・松田 1997)をあげることができる。同書では、「川世界」と「外世界交渉」という地域概念が示され、両者の歴史形成およびそのダイナミズムが語られている。これは、外部との接触と内部の歴史形成のリズムによって展開されてきたアフリカ史を理解する上で独自の地域概念を提示したものであった。川田順造(川田 2009)によって編集された『アフリカ史』では、文化が共通する地域を基本とする「文化領域」、文化の伝播を要因とする「文化圏」などのこれまでの議論を検討した結果、アフリカは6つの地域に分類されている。

すなわち、東・北東アフリカ、東アフリカ沿岸部、インド洋西海域、西アフリカ、バントゥー・アフリカ、南部アフリカである。この中でアフリカ史の理解に大陸部だけではなく、沿岸部ないし島嶼部、および大洋を視野に入れている点は、世界史とアフリカ史という大きなテーマを考える上で、陸に加えて海(sea)と洋(ocean)を視野に入れる展望を拓いたといえる。(日本アフリカ学会 2014)

- 5) サハラ以南アフリカを代表する歴史家やアフリカ大陸以外に離散したディアスポラの歴史家によって構成されるアフリカ史協会(The Association of African History)は、1972年にセネガルのダカルで設立され、その本部はマリのパマコに置かれている。2007年5月にエチオピアのアディスアベバで第4回大会が開催され、アフリカ史における社会、国家およびアイデンティティに関する諸問題が多面的に論じられた。(Zewde 2008) また、ジンバブウェの農業社会研究所(African Institute of Agrarian Studies)、ブラジルのカソリック大学の国際関係学部(Department of International Relations)、南アフリカの政策研究センター(Centre for Policy Studies)の三研究機関によって2007年5月にブラジルで国際会議が開催され、その後、二度にわたって農村社会問題(agrarian question)と民族問題(national question)に関する国際会議が開催された。後者の会合の成果は、Moyo, Sam and Yeros, Paris ed. (2011), *Reclaiming the Nation : The Return of the National Question in Africa, Asia and Latin America*, Pluto Press. として刊行されている。なお、民族と国家の問題を考察するうえで、マムダニの以下の文献も有益である。Mamdani, Mahmood (1996), *Citizen and Subject : Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism*, James Currey, Do. (2012), *Define and Rule : Native as Political Identity*, Wits University Press.
- 6) アフリカ人ディアスポラの歴史研究に関しては数多くの成果が出版されているが、パトリック・マニング(Patrick Manning)の研究が総合的である。マニングは、アフリカ人ディアスポラを個々の地域や国家の経験に断片化することを否定し、アフリカ人とその子孫たちの多様な移動ルートをたどり、ディアスポラ相互の接触や彼らとヨーロッパ、アジア、南北アメリカとの遭遇を跡付けようとしている。マニングは、これらの歴史を織り上げることで、大西洋、地中海、インド洋の水路がどのようにして黒人社会のダイナミックな交流をもたらし、どのようにしてディアスポラのつながりがグローバル・ヒストリーを形成していったのか、考察している。(Manning 2009) なお、最近のアフリカ人ディアスポラの動きに関する研究としては、Koser, Khalid ed. (2003), *New African Diasporas*, Routledge. また、多様な分野からアプローチした研究としては、Olaniyan, Tejumola and Sweet, James H., eds. (2010) *The African Diaspora and the Disciplines*, Indiana University Press. を参照。
- 7) アフリカを壮大なスケール(history on an epic scale)で描こうという試みは魅力的であるが、それだけに困難がともなうであろう。ジョン・アイリフ(John Iliffe)は、アフリカ人を最初の入植者(first colonizer)として規定し、雄大なアフリカ人口史をまとめている。(Iliffe 2005, 2018) アフリカ大陸を一つの歴史の実体として描こうとした一大事業は、ユネスコ(UNESCO)の編集した『アフリカの歴史』(*The General History of Africa*)全8巻(1981~1993年)であった。この事業はアフリカ大陸の一体性を掘り起こす作業であるとともにアフリカ大陸の統一にむけた未来を描き出すものであった。(富永 2002、北川 2018)
- 8) このような視点ないし思考の旋回の試みはすでに始まっている。たとえば、日本史・アジア史研究とアフリカ史研究の接続の試みが行われた。(北川 2002) また、国際関係(史)研究の「歴史化」"historicization"と「文脈化」"contextualization"を図ろうとした「アフリカとアジアの絡まりあい」(Africa and Asia Entanglements in Past and Present)のプロジェクトが2013年から始まった。これは、国際関係(史)研究を「浅い歴史」(shallow history)から「深い歴史」(deep history)に向け、また、世界史あるいはグローバルな歴史理解の枠組みについてアフリカを軸に「大西洋システム」(Atlantic System)から「インド洋システム」(Indian Ocean System)に移行させようという試みであ

- る。(Cornelissen and Mine, 2014, Kitagawa, 2016a)
- 9) 本稿は、以下の共同研究において提示された諸課題について研究分担者として課された調査研究の成果をまとめたものである。2011～2013年度 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同研究「アフリカ史叙述の方法にかんする研究」(代表者 永原陽子)、2014～2016年度 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同研究「アフリカに関する史的研究と資料」(代表者 刈谷康太)、2012～2015年度基盤研究(A)「世界の中のアフリカ史の再構築」(代表者 国立民族学博物館 竹沢尚一郎)
 - 10) これについては『第1回国際アフリカニスト会議報告集』を参照。Brown, Lalage and Crowder, Michael eds. (1964), *The Proceedings of the First International Congress of Africanists, Accra 11th-18th December 1962*, Longmans. なお、「学会通信 第2回国際アフリカニスト会議の勧告と決議について」(土井真弓訳)『アフリカ研究』9号、1969年、58-65ページも参照。
 - 11) アフリカ史を研究するものにとって史料に通じていることは言うに及ばず、その史料を批判的に評価できるように歴史学の理論や歴史研究の核心をなす資料批判の方法にも通じていなければならない。史料が作成され、伝承される過程や解釈には政治性がつきまとうからである。史料を解明しようとする歴史家にはこの史料が生まれた「政治の磁場」を究明する力量が求められる。たとえば、植民地期の文書史料を批判的かつ創造的に読み、その記述の連続性、欠落および変更の考証に基づいて植民地期およびその後のアフリカの歴史を考察する必要がある。この作業は、目立たないものであるが、アフリカの過去を読み解き、現在への認識を深め、未来を語る上で欠くことのできないものである。(北川 2008、井野瀬・北川 2011) なお、以上の問題への取り組みは、以下の二つの研究書を参照。Philip, John Edward ed. (2005), *Writing African History*, University of Rochester Press. Falola, Toyin and Jennings, Christian eds. (2003), *Sources and Methods in African History: Spoken, Written, Unearthed*, University of Rochester Press.
 - 12) ケープタウン大学のシャミール・ジェッピー (Shamil Jeppie) 教授を中心にして南アフリカと西アフリカの研究者の協力に基づいて South Africa-Mali Tombouctou Manuscript Project が進んでいる。このプロジェクトは、エチオピア、マダガスカル、東アフリカ沿岸におけるアラビア語、アムハラ語、アジヤミ語の著作を網羅するものであり、アフリカ史研究の新しい展望 (vistas) を開くものとして期待されている。(Hofmeyr 2013) 「アフリカにおけるイスラーム化」および「イスラームのアフリカ化」という課題は、アフリカ史研究における迷宮 (Labyrinth) のようであると言説もあるが、具体的な事例研究を重ねる中で究明していく他に道はないであろう。(Robinson 2004) そうした試みの一つとして、刈谷康太 (2012) 『イスラームの宗教的・知的連関網—アラビア語著作から読み解く西アフリカ—』東京大学出版会をあげておきたい。
 - 13) かつて国際日本文化研究センターの園田英弘が提起した問題を受けるならば、アフリカ史研究は「欠如理論」ではなく、「逆欠如理論」の立場から構築することが重要であろう。(園田 2005) 「逆欠如理論」とは、「外国にあるものは日本にないから日本は異質だ」(「外国にあるものはアフリカにはないからアフリカは異質だ」という発想から抜け出して、それとは逆に「日本にあるものは外国にもあるはずだ」(「アフリカにあるものは外国にもあるはずだ」という理解の方法を指す。この理解の方法は、アフリカ史においてはどのようにすれば「言あげできない人々」“History of Inarticulate”を歴史の担い手として記述することが可能か、アフリカ史研究において見落とされてきた課題を論じる道を開く糸口になるのではないだろうか。(永原 2011)
 - 14) アフリカ史の重要なテーマとして、キリスト教とイスラームの拡散とインパクトの研究を忘れるわけにはいかない。アフリカ史研究においてミッションの歴史 (mission histories) はヨーロッパ人ミッションナリーのイニシヤティブの立場からの研究と並んでアフリカ人のレスポンスに関わる研究も現れ

ている。(Konieh and Ngoku 2007) また、アフリカ人のイスラームに関する研究は数多くみられるが、政治、経済、および社会の発展全体の一部としてイスラームの展開の歴史を捉える研究がもっと現れてもよいであろう。(Robinson 2004)

- 15) 近年、以下のようなアフリカの思想史や宗教史の研究にかかわるツールとして宗教辞典、思想辞典、人名辞典が相次いで刊行されている。これも思想史や宗教史におけるアフリカ史の「主流化」への動きの一つとしてとらえられるであろう。Irere, F. Abiola and Jeyifo, Biodun eds. (2010), *The Oxford Encyclopedia of African Thought*, 5 vols, Oxford University Press. Asante, Molefi Kete and Mazama, Ama eds. (2009), *Encyclopedia of African Religion*, 2 vols, Sage. Akyeampong, Emmanuel K. and Gates, Henry Louis, Jr. eds. (2012), *Dictionary of African Biography*, 5 vols., Oxford University Press.
- 16) この例としては、Boahen, A. Adu ed. (1985), *General History of Africa Vol.7 : Africa under Colonial Domination, 1880-1935*, Heinemann, Boahen, A. Adu (1987), *African Perspective on Colonialism*, Iliffe, John (2017), *African: The History of A Continent*. および Coquery-Vidrovitch, Catherine (2009), *Africa and the Africans in the Nineteenth Century : A Turbulent History*, M. E. Sharpe. を挙げることができる。
- 17) 近年のこのような試みについては、たとえば、Kitagawa, Katsuhiko ed. (2016), *Africa and Asia Entanglements in Past and Present : Bridging History and Development Studies : Conference Proceedings*, Asian and Africa Studies Group, Faculty of Economics, Kansai University. また、The fourth International Symposium : Africa and Asia Entanglements in Past and Present, Mainstreaming Africa in the Discourse of “Development” : the Idea of Development through the Bandung Conference at Kansai University on 18-19 May 2017. においてもこの課題が議論された。
- 18) 国際学術連合 (Union Académique Internationale, UAI, International Union of Academics) は、世界60か国の国内学術団体 (National Academics) の連合体で、人文および社会科学の分野を中心とする学術連合である。UAIは、1919年に Academie des Inscriptions et Belles-Lettres のイニシアティブで創設された。第一次世界大戦後、世界では平和と相互理解が求められており、あらゆる国際協力が構想された時代であった。1919年5月に開かれた会合で連盟規約のドラフトが準備された。同年10月15日～18日に再度会合が開催され、人文学における国際協力が始まった。この学術連合には、11か国 (ベルギー、デンマーク、フランス、イギリス、ギリシャ、日本、イタリア、オランダ、ポーランド、ロシア、アメリカ合衆国) の国内学術団体の代表と代表を派遣しない賛同国 (スペイン、ノルウェー、ルーマニア、ユーゴスラビア、ポルトガル) が加わった。第1回会議は、1920年5月26日～28日にブリュッセルで開催され、ベルギーの歴史家アンリ・ビレンヌが会長に選出された。3件のプロジェクト—Corpus vasorum, antiquorum, Alchemical Manuscript, Works of Grotius—の出版が提案された。第二次世界大戦までは事業の進行は緩慢であったが、13のプロジェクトが採択された。第二次世界大戦後、1949年には、UAIは、International Council for Philosophy and Human Studies (ICPHS)、Conseil Internationale de la Philosophie et des Sciences Humaines (CIPHS) の設立にかかわった。現在まで、81プロジェクトが完成、あるいは進行中であるが、アフリカに関するプロジェクトとして『アフリカ史史料集』(Fontes Historiae Africanae, HHA) の編集と出版事業をあげることができる。UAIにおける『アフリカ史史料集』の編集と出版に関する国際事業は、1962年に Ivan Hrbek 教授によってプラハのチェコスロバキア科学アカデミーのオリエンタル研究所から提案された。この提案は、1964年、UAIによって採択され、UNESCOの哲学人文学国際協議会のイニシアティブでカテゴリーAプロジェクトとして実施されることになった。1950年代と1960年代にアフリカに関する既存の歴史的知識は批判的に評価され始め、根本的に再定義され始めた。アフリカの過去の研究に対する新しいアプローチを精緻なものとする中で、アフリカ史研究は、アフリカをかつて過去のないものとして、

また自生的な文化のないものとして拒絶するかつての歴史研究の限界を超えてアフリカ人のパースペクティブに基づき、またもっと広い世界大のパースペクティブをベースにした歴史的学知の生産と公刊にむけて進み始めたのである。アフリカ人のパースペクティブからアフリカ史を再評価し書きなおす努力、また、アフリカの植民地化以前の歴史をアフリカ史の脱植民地化の最初で重要な段階として回復し、再建する努力は、初期の時代の文書資料の相対的欠如、記述の量的な差異や時と場所による不均等な分布によって挫折することになった。これまで未使用かあるいはほとんど使われることがなかった新しい歴史史料が発見され、検証されねばならなかった。また、これまでの通念にとらわれない歴史史料へのアプローチが開発されねばならなかった。記述するという習慣なしに生み出された過去についての資料研究の方法が精緻化され、オーラル資料に基づく歴史の再構築の可能性を説明しなければならなかった。新しいアフリカ史の研究と記述は、多様なカテゴリーの歴史史料に注意をむけることになった。その存在は初期にはまったく無視されていたものであった。すなわち、歴史的口頭伝承、アフリカ人の初期の著作、アフリカの現地で記述された文書（アジャミ、ラテン、アラビア語の文書）であった。これらの歴史史料によって「アフリカ人の声」(African Voice)を知ることができる。これらの史料は、アフリカにおけるヨーロッパ人の活動を記録した資料とともにアフリカに新たな光を当てるものであった。以上背景のもとで、1964年、CIPSH UNESCOのイニシャティブのもと、ブリュッセルのUAIによってFontes Historiae Africanaeのプロジェクトが採用された。これは、幅広い国際協力のもとでアフリカ史の記述史料の出版を支援しようというものであった。このプロジェクトの主要な目的は、プロポーザルに記載されているように、記述資料とオーラル資料、オリジナルな言語でサハラ以南アフリカの歴史に関する個々のトピックに取り組むために集成された歴史的なテキストや文書のコレクションを批判的に編集したり、翻訳（英語かあるいはフランス語に）して出版する準備をすすめることであった。その意図は、外国の言語のテキストを英語またはフランス語に翻訳すること、そしてオリジナルな文書や文書館の資料を出版することはアフリカや外国にベースを置いて研究している学者によるアクセスを改善することになろうということであった。優先されたのは、これまで未公開のテキストや断片的な資料集の刊行であったが、すでに出版された著作の新しい編纂にも後に取り込まれることになっていた。3つの主要なシリーズが、資料の主要な言語グループに基づいてグループ別に出版されることになった。すなわち、アラビア語、エチオピア語、エチオピア語以外のアフリカの諸言語である。第4のシリーズとしてSeries Variaが、ごくわずかな著作しか存在しない言語に資するために刊行されることが決まった。たとえばラテン語の資料である。この試みが有望であれば、言語にしたがってさらに別のシリーズの刊行準備が行われると期待された。シリーズタイトルSubsidia Bibliographiaもまた形成されてきた。このプロジェクトの開始は、別のプロジェクト、General History of Africaの準備プロジェクトと並行していた。この第一段階は、1965～1969年で、資料と資料集を収集し、アーカイブのインベントリーに編纂して、Guide to the Sources of the History of Africaを準備しようというものであった。これは、後に9巻で出版された。(Viera Pawlikova-Vilhanova 2011)

- 19) アフリカ史計画の遂行と同種の計画作成のために、アフリカの国立研究所・大学と協議すること、アフリカニスト会議の専門家の協力を得て、アフリカの研究施設および大学の斡旋で、史料発行の年次計画、国際的規模の「アフリカ史料集成」を検討することが要請された。
- 20) 「学会通信 第2回国際アフリカニスト会議の勧告と決議について」(土井真弓訳)『アフリカ研究』9、1969、pp.58-65)を参照。たとえば、アラビア語の史料に関する研究はジョン・ハンウィック教授(John Hunwick)によって1960年代初期にイバダン大学で開始された。1973～1986年にかけて同教授はIAUの国際的な『アフリカ史料集』プロジェクトの中心的な役割を演じており、その間、サハラ地域およびサハラ以南地域のアフリカのイスラームのアラビア語資料の収集、保存、分析、および翻訳

を推進した。また、同教授は、トンブクトゥに最初の研究図書館、Centre de Documentation et de Recherches Historiques Ahmad Baba (CEDRAB) を設立するうえで、中心的な役割を演じた。このセンターには約20,000点のアラビア語資料が収蔵されている。(Viera Pawlikova-Vilhanova, 2011)

- 21) このシリーズは、現在、13言語で読むことができるが、その中にはアフリカの言語—スワヒリ、フルベ、ハウサーも含まれている。それに加えて12冊の『研究と資料』(Studies and Documents)と12巻の『アフリカ史史料ガイド』(Guide to the Sources of the History of Africa)がこのシリーズを補完するものとして各国で刊行された。これまで刊行された8巻のGHAシリーズのタイトルは以下のとおりである。**I**: *Methodology and African Prehistory* (1981), Editor: J. Ki-Zerbo, **II**: *Ancient Civilizations of Africa* (1981), Editor: G. Mokhtar, **III**: *Africa from the Seventh to the Eleventh Century* (1988), Editor: M. Elfasi, Assistant Editor: I. Hrbek, **IV**: *Africa from the Twelfth Century to the Sixteenth Century* (1984), Editor: D. T. Niane, **V**: *Africa from the Sixteenth to the Eighteenth Century* (1992), Editor: B. A. Ogot, **VI**: *Africa in the Nineteenth Century until the 1880s* (1989), Editor: J.F.Ade Ajayi, **VII**: *Africa under Colonial Domination 1880–1935* (1985), Editor: Adu Boahen, **VIII**: *Africa since 1935* (1993), Editor: Ali Mazrui. このシリーズとともに刊行された『研究と資料』は以下の通りであった。**Studies and Document 1**: *The Peopling of Ancient Egypt and the Deciphering of Meroitic Script*: Proceedings of the Symposium held in Cairo from 28 January to 3 February 1974, UNESCO, 1978. **Studies and Document 2**: *The African Slave Trade from the Fifteenth to the Nineteenth Century*, : Reports and Papers of the Meeting of Experts organized by UNESCO at Port-au-Prince, Haiti, 31 January to 4 February 1978, UNESCO, 1979. **Studies and Document 3**: *Historical Relations Across the Indian Ocean*: Report and Papers of the Meeting of Experts organized by UNESCO at Port Louis, Mauritius, from 15 to 19 July 1974, UNESCO, 1980. **Studies and Document 4**: *The Historiography of Southern Africa*: Proceedings of the Experts Meeting held at Gaborone, Botswana, from 7 to 11 March 1977, UNESCO, 1980. **Studies and Document 5**: *The Decolonization of Africa: Southern Africa and the Horn of Africa*: Working Documents and Report of the Meeting of Experts held Warsaw, Poland, from 9 to 13 October 1978, UNESCO, 1981. **Studies and Document 6**: *African Ethnonyms and Toponyms*: Report and Papers of the Meeting of Experts organized by UNESCO in Paris, from 3 to 7 July 1978, UNESCO, 1984. **Studies and Document 7**: *Historical and Socio-Cultural Relations between Black Africa and the Arab World from 1935 to the Present*: Report and Papers of the Symposium organized by UNESCO in Paris, from 25 to 27 July 1979, UNESCO, 1984. **Studies and Document 8**: *The Methodology of Contemporary African History*: Report and Papers of Experts organized by UNESCO at Ouagadougou, Upper Volta, from 17 to 22 May 1979, UNESCO, 1984. **Studies and Document 9**: *The Educational Process and Historiography in Africa*: Final Report and Papers of the Symposium organized by UNESCO in Dakar (Senegal) from 25 to 29 January 1982, UNESCO, 1985. **Studies and Document 10**: *Africa and the Second World War*: Report and Papers of the Symposium organized by UNESCO at Benghazi, Libyan Arab Jamahiriya, From 10 to 13 November 1980, UNESCO, 1985. **Studies and Document 11**: *Libya Antiqua (A Study on the Fezzan and Relations between the Mediterranean, the Chad Basin and the Nile Valley between the First and Seventh Century)*: Report and Papers of the Symposium organized by UNESCO in Paris, from 16 to 18 January, 1984, UNESCO, 1986. **Studies and Document 12**: *The Role of African Student Movements in the Political and Social Evolution of Africa from 1900 to 1975*: Report and Papers of the Symposium organized UNESCO in Dakar (Senegal) from 5 to 9 April 1988, UNESCO, 1994. また、各国で調査が行われた結果、以下のような『アフリカ史史料ガイド』が刊行された。*Guide to the*

- Sources of the History of Africa South of the Sahara in **Federal Republic of Germany*** (1970), *Guide to the Sources of the History of Africa South of the Sahara in **Spain*** (1971), Inter Documentation Company AG of Zug (Switzerland), *Guide to the Sources of the History of Africa South of the Sahara in **France I** : Sources Conserved in the Archive* (1971), Inter Documentation Company AG of Zug (Switzerland), *Guide to the Sources of the History of Africa South of the Sahara in **France II** : Sources Conserved in the Libraries* (1976), Inter Documentation Company AG of Zug (Switzerland), *Guide to the Sources of the History of Africa South of the Sahara in **Italy*** (1973), Inter Documentation Company AG of Zug (Switzerland), *Guide to the Sources of the History of Africa South of the Sahara in **Italy*** (1974), Inter Documentation Company AG of Zug (Switzerland), *Guide to the Sources of the History of Africa South of the Sahara in **the Holy Sea*** (1983), Inter Documentation Company AG of Zug (Switzerland), *Guide to the Sources of the History of Africa South of the Sahara in **Scandinavia** : Sources in Denmark, Norway and Sweden* (1971), Inter Documentation Company AG of Zug (Switzerland), *Guide to the Sources of the History of Africa South of the Sahara in **the Netherland*** (1978), KG Sauer Verlag Tostfach of Munich, *Guide to the Sources of the History of Africa South of the Sahara in **the United States of America*** (1977), African Studies Association of Waltham, Massachusetts, *Guide to the Sources of the History of Africa South of the Sahara in **Great Britain and Ireland*** (1971), *Indian Sources for African History (Guide to the Sources of the History of Africa and of the Indian Diaspora in the Basin of the Indian Ocean in the National Archives of India)*, Vol.1, Ed. by S. A. I. Tirmizi, International Writers Emporium (1988), *Indian Sources for African History (Guide to the Sources of the History of Africa and of the Indian Diaspora in the Basin of the Indian Ocean in the National Archives of India)*, Vol.2, Ed. by S. A. I. Tirmizi, International Writers Emporium (1989), *Indian Sources for African History (Guide to the Sources of the History of Africa and of the Indian Diaspora in the Basin of the Indian Ocean in the National Archives of India)*, Vol.3, Ed. by S. A. I. Tirmizi, International Writers Emporium (1993).
- 22) このプロジェクトは「アフリカ文化のルネサンス」(African Cultural Renaissance)にとって決定的に重要である。歴史教育はアフリカ人のアイデンティティを形成し、アフリカ人とアフリカ人を祖先にもつ人々の共有する価値観と遺産への理解を改善する上で役に立つと認識されるようになった。2006年にスーダンのハルツームで行われたアフリカ連合(AU)のサミット(首脳会議)で採択された「アフリカ・ルネサンス憲章」(Charter for African Renaissance)の中では次のように明言されている。すなわち、「UNESCOによって出版された*The General History of Africa*はアフリカの歴史を教えるための妥当な基盤を構成しており、多くの言語でそれが普及されることを勧告する。」このプロジェクトは、また、「アフリカの教育発展の第二の10年」(The Second Decade for the Development of Education in Africa 2006-2015)にとっても重要であった。この行動計画(Action Plan)では、教育と文化の結合を強化し、教育のコンテンツの質を高めることが強調されている。以上の背景のもとで、AUの首脳会議と教育大臣会議は、UNESCOのイニシャティブを推奨し、PUGHAへの支持を再確認し、アフリカ諸国にその実施のための十分な財政支援を求める決議を行った。AUは、このパンアフリカのプロジェクトへの支援を再確認し、それがアフリカ統一の達成の文化的基盤となると強調している。
- 23) GHA第9巻では、アフリカの直面している新しい課題が分析される。その課題の中には、アフリカの統一、パンアフリカニズム、地域統合、教育と文化、若者、ジェンダー、健康、文化の多様性、創造性、芸術、文化と開発、アフリカ内の異文化対話、平和と環境、気候変動、都市化、科学の研究と革

新、ヘルスケア、持続可能な開発、良きガバナンス、南南協力、アフリカ人ディアスポラの関係などがあげられている。（“Volume IX of General History of Africa : Guidance Note for Authors” unpublished memorandum）

- 24) 「UNESCO General History of Africa 第9巻」の目指すものは、GHAの内容のアップデート、グローバル・アフリカの提示、アフリカ史研究の諸概念の脱植民地化であった。第9巻の基本的な構成プランと主要な担当者は以下のとおりである。

第一部 GHAをアップデートすることに焦点を置き、人類の起源と最初の人類の文明の理論を示す。（Martial Ze Belinga and Olabiyi B. Joseph Yai）

- 1 認識論のフォーラム（Douiaya Konate）
- 2 GHA各巻の再検討（Augustin F. C. Holl）
- 3 最近の古生物学や考古学の研究における新展開に照らして人類の起源と最初の文明の出現に関する理論をアップデートすることで「初期のアフリカ」（Early Africa）について書く。（Douiaya Konate）

第一部でとりあげる課題

人類の起源

アフリカの人々の考古学および人類学研究

大陸への人口の広がり

環境の次元

技術の開発と移転

アフリカ起源の知的システム

生人類学（Bio-anthropology）の貢献

古代アフリカ文化の出現と進化

第二部 グローバル・アフリカの多面的な側面を研究し、世界に拡散しているディアスポラの異なる表れ方を研究する。（Carole Boyce-Davies）

- 1 認識論のフォーラム（Carole Boyce-Davies）
- 2 グローバル・アフリカ（Global Africa）とアフリカ人ディアスポラの特徴（Mamadou Diouf）
- 3 過去と現在の抵抗（Paul Lovejoy）
- 4 近代世界の建設に対するディアスポラの貢献（Vaniclea Silva Santos）

第二部でとりあげる課題

他の大陸の原住集団との関係

アフリカからの多様な出発の波とディアスポラ化

世界全体のアフリカのプレゼンスの地域割り

多様なアフリカ帰還運動

ディアスポラのイメージにおけるアフリカ（準拠としてのアフリカ）

ジェンダーの概念と女性の役割

多様な地域における近代社会に対するアフリカ人の貢献（学知、ノウハウ、精神性、思想、政治、文化、社会、象徴的表象など）

抵抗とその意味

ハイチ革命とそのグローバルなインパクト

差別と人種主義の問題

芸術、言語、口頭伝承（orality）、記述

アフリカ起源の宗教的混合性（syncretism）と諸制度

若者と革新

第三部 現代のグローバル・アフリカにとって、その機会と新たな課題を検討する。(Catherine Coquery-Vdrovitch)

- 1 認識論のフォーラム (Catherine Coquery-Vdrovitch)
- 2 「グローバル・アフリカ」の新課題 (Hilary Beckles)
- 3 現代世界におけるアフリカの位置 (Tayeb Chenntouf)
- 4 第三千年紀への転換期におけるアフリカ (Faranirina Rajaonah)

第三部でとりあげる課題

新しい国際関係とアフリカの位置

アフリカ、南アフリカ、カリブ諸島、インド洋諸島の新しい連帯

遺産—文化の変化と連続性

アフリカの資源のコントロールに関する新たな戦略（土地、戦略的資源など）

ポスト人種主義のアプローチと抵抗の再定義

和解と保障の課題

グローバル・アフリカの現代芸術の創造と市場への挑戦

21世紀のパンアフリカニズムとその課題

グローバル・アフリカの意見としての表現と空間の自由

アフリカの宗教の原理主義とアフリカ宗教の位置

アフリカの知識、ノウハウ、世界観の理解

アフリカの価値観とビジョンに基づく新しい開発モデルの構築

アフリカの経験に基づくガバナンスと権力行使の新しいモデルの構築

アフリカと世界における代替物を構築するうえでのアフリカの哲学、宇宙観、実践のレベル

アフリカの都市化とその課題

アフリカの将来

“Volume IX of General History of Africa : Guidance Note for Authors” unpublished memorandum 参照。

- 25) 詳細についてパウロ・カルネイロ教授の執筆した前文に記載されている。Professor Paulo E. De Berredo Carneiro (President of the International Commission for a History of the Scientific and Cultural Development of Mankind), “Preface”, *History of Mankind : Cultural and Scientific Development*, Vol.1, Part one : Prehistory, Unwin, 1963, p. xvii-xxiii.
- 26) 企画協力委員は102名であった。その中で日本からは、中国史の貝塚茂樹（1904～1987）、科学史の矢島祐利（1903～1995）、近世日本対外交渉史の岩生成一（1907～1988）、仏教学の鈴木大拙（1870～1966）の各氏が参加していた。なお、アフリカについては、Professor Aziz S. Atiya（エジプト）、H.E.M.L.S. Semghor（セネガル）、Professor A.N. Pelzer（南アフリカ連邦）の3か国の研究者の名前がみられるだけであった。
- 27) 前シリーズと異なり、新シリーズでは、各巻に人類史の研究に関する興味深いテーマを論じるセクションが設けられている。たとえば、20世紀を対象とした第7巻では、以下のような歴史研究のテーマについて考察されている。20世紀初頭の世界、第二次世界大戦、帝国の終焉と国際システムの変革、民族解放運動と植民地支配の崩壊、ポストコロニアル期の諸問題（旧植民地列強と新興諸国）、ポストコロニアル問題への対応、新興諸国と世界政治（アフリカと新国際経済秩序）、女性、若者、旧世代、身体障害者、伝統的な科学知識、近代科学と時間・空間概念の変化、20世紀前半の思想、20世紀後半の知識獲得活動としての科学、薬品と大衆の健康、技術と応用科学（農業、海洋資源、エレクトロニク

ス、宇宙科学、物質科学、エネルギー資源、文化と通信)、科学技術の知識の利用の社会的結果、人文社会科学(歴史学、人類学と民俗学、考古学、人口学、社会学、経済学、法学、政治学、言語学、地理学)、社会科学の応用(開発学)、哲学、宗教的伝統、倫理学、心理学、文化研究、文学・芸術研究、文化とスポーツ、教育、情報と通信などである。

- 28) ところで、近年のアフリカ史研究の主流化の動向あるいはアフリカ史研究の国際的潮流を知るうえで、最近出版されているアフリカ史研究のシリーズとツール類についての調査研究が必要であろう。これについては、今後の課題としておきたい。ただし、以下の動向だけ記しておくことにする。アフリカ史研究に必要な主要な史料研究としては、Brizuela-Gareth, Esperanza and Gets, Trevor, *African History : New Sources and New Teaching for Studying African Past*, 2012. が有益であり、また、最近のアフリカ史学史の基本書としては、Falola, Toyin and Jenny, *Source and in African History*, と Philips, John, *Writing African History* をあげることができる。アフリカ史研究のツールとしては、Shillington, Kevin ed., *Encyclopedia of African History*, 3 vols, Fitzroy Dearborn, New York, 2005. がある。本シリーズの収録項目は1100で、助言者20名、執筆者330人(うち130人はアフリカ人)がかかわった。シリーズの各項目の配列は、第1巻A～G、第2巻H～O、第3巻P～Zとなっている。全体としては、アフリカ人の視点から編集することを心掛け、アフリカ史における連続性と変化の連関を描こうとしている。本シリーズの全体の3分の1は、18世紀末までのアフリカ史で、残りの3分の2は、各地域の歴史、19世紀の前植民地期、20世紀の植民地期、ポストコロニアルの現代である。Cambridge版のアフリカの歴史(1975～1986年)やUNESCO版のアフリカ史(1981～1993年)と同様に地域としては、大陸全体をカバーしている。主要なテーマと時代区分は下記のとおりである。初期先史時代(Early Prehistory)、後期先史時代(Later Prehistory)と古代史、18世紀末までの鉄器時代(中央、南部アフリカ)、18世紀末までの鉄器時代(東、北・中央アフリカ)、18世紀末までの鉄器時代(北アフリカ)、18世紀末までの鉄器時代(西アフリカ)、ヨーロッパ帝国主義の始期、スクランブル期、植民地支配の時代、19世紀と20世紀の近代国家の歴史、ポスト・コロニアルのアフリカ、歴史上重要なアフリカの近代都市、アフリカ史研究展望、地域史概略(東、北、南)、パンアフリカレベルで比較可能なトピックと論争。これ以外に最近出版された興味深いアフリカ史研究のツールとしては、Irele, F. Abiola and Jeyifo, Biodua eds., *The Oxford Encyclopedia of African Thought*, Oxford University Press, 2010. Akyepong, Emmanuel K. and Gate, Henry Louis eds., *Dictionary of African Biography*, Oxford University Press, 2012. Asante, Molefi Kete and Mazana, Ama eds., *Encyclopedia of African Religion*, Sage, 2009. Parker, John and Reid, Richard eds., *The Oxford Handbook of Modern African History*, Oxford University Press, 2012. をあげることができる。
- 29) また、ルンド大学の経済史学部で刊行されている論集(*Lund Papers in Economic History*)によれば、以下のような認識が示されていた。アフリカ経済史研究の将来にとって二つの優先課題がある。第1は、アフリカ大陸における諸大学での研究を強化し、刺激することであり、第2は、経済史研究におけるアフリカの重要性をさらに強調することである。(Jerven, Morten, Austin, Gareth, Green, Erik, Uche, Chibuike, Frankema, Ewout, Fourie, Johan, Inikori, Joseph E., Moradi, Alexander, and Hillbom, Ellen, (2012), "Moving Forward in African Economic History : Bridging the Gap Between Methods and Sources", *Lund Papers in Economic History*, No.124, Department of Economic History, Lund University.)
- 30) アフリカ経済史ネットワーク(AEHN)は、スウェーデンのRiksbankens Jubileumsfondの助成金で設立された。2011年12月16日にルンド大学で第1回AEHNワークショップが開催され、2012年7月7日にはステレンボッシュ大学で第2回AEHNワークショップが開催されている。その後、AEHNは、毎月2回、Newsletterを発行し、今日に至っている。たとえば、最近号としては、*African Economic*

History Newsletter, Issue 46, May 2020. を参照。

- 31) *South African Journal of Economic History* の第1巻第1号から数えて第25巻第1号にあたる *Economic History of Developing Regions* の編者の前書き (Editorial Statement) には、次のように述べられている。本誌は、工業化してきた「北」だけでなく発展途上にある「南」の経済変化の研究を促進し、経済発展の歴史研究の革新をもたらそうとしている。また、この学会誌は、計量的な方法あるいは質 (定性) 的な方法のいずれのアプローチの論文も受け入れる。こうした試みがアフリカをはじめとして発展途上地域における経済史研究をいっそう強化し、さらに新たな次元を開くことになる。(*Economic History of Developing Regions*, 2010, 25-1, p.1.)
- 32) 装いを新たにした『発展途上地域の経済史』の編集チームのビジョンは、本号に収められている “The State and Scope of the Economic History of Developing Regions” と題する論文に示されている。本学会誌によると、学会自体も Economic History Society of **South Africa** から The Economic History Society of **Southern Africa** に改称された。それでは、南アフリカ経済史学会が改組されたとき、それに関係した研究者たちは発展途上国の経済史研究の状況と見通しをどのように考えていたのだろうか。「この論文は発展途上地域の経済史の研究の現状と見通しを検討するものである。経済発展に関する歴史の知識の重要性を強調しておきたい。発展途上国についての現在の研究の質には目を見張るものがあるが、こうした地域に焦点を当てた研究が公刊される割合は低い。これまでの経済史研究では、北アメリカと西ヨーロッパのサクセス・ストーリーに関係するものとして、制度 (institutions)、経路依存性 (path dependency)、技術変化 (technological change)、進化過程 (evolutionary process) が注目されてきたが、それらが世界における発展途上地域の経済成長とどのようにかかわってきたのかについての理解を促進するために貢献できる将来の研究のためのフォーラムが必要である。発展途上地域に関する多くの貴重なデータセットや歴史的記述の研究はいまだに未開拓のままであるし、多くの興味深い疑問にはまだ解答が得られていない。これは、まさにエキサイティングである。経済の過去に関心をもつ経済史家や他の学問研究者は、発展の相違、経済破綻の背後にある諸要因、サクセス・ストーリーの生起を誘発する動因の違いの生まれる複雑な諸原因を解き明かす機会を持たねばならない。」(Schirmer, Stefan et. al, (2010) “The State and Scope of the Economic History of Developing Regions”, *Economic History Society of South Africa*, 25-10.) この新しい試みに加わった経済史家は、以下の通りである。Stefan Schirmer (University of the Witwatersrand, South Africa), Latika Chaudhary (Scripps College, USA), Metin Coggel (University of Connecticut), Jean-Luc Demonsant (University of Guanajuato, Mexico), Johan Fourie (Stellenbosch University), Ewout Fankema (Utrecht University, the Netherland), Giampaolo Garzarelli (University of Witwatersrand, South Africa), John Luiz (University of Witwatersrand, Business School, South Africa), Martine Mariotti (Australian National University, Australia), Grietjie Verhoef (University of Johannesburg, South Africa), Se Yan (Peking University, China)
- 33) この論文でフェンスケ (Fenske) は次のように論じた。「『アフリカ史ジャーナル』の最近の論文のなかでホプキンス (A. G. Hopkins) は、経済学者は最近10年間を費やしてアフリカの『新』経済史を書いている。それは、歴史家の注意を回避したものであると書いている。また、同氏は ethnolinguistic fractionalization や reverse of fortune のテーゼをこの『新』経済史の基軸的な洞察であるとラベル貼をしている。この論文では、アフリカの新経済史に対する最も貴重な貢献は「大きな理論」(broad theories) によっては区別されるべきではなく、原因の推理 (causal inference) への注意深い集中によって区別されるべきであると論じている。この論文でフェンスケはこの研究分野に対する最近の貢献を展望し、それらをアフリカの『旧経済史』と比較し、歴史家に対するホプキンスの助言を修正しようと試みた。これをめぐっては、『発展途上地域の経済史』誌上でも議論が展開された。ホプキンス

は、“Causes and Confusions in African History”と題する論考の中で、また、フェンスケは、“The Causal History of Africa : A Response to Hopkins”の中で双方の主張を展開している。両者の意図は、アフリカ経済史の分野では方法論のまったく不必要な二分化（bifurcation）を止めたいところにあるようである。

- 34) この両者の意見に対してオースティンは、“African Economic History in Africa”と題する論考を寄稿し、グリーン（Erik Green）とニャンバラ（Pius Nyambara）の見解に批判を加えている。オースティンは、熱帯アフリカにおけるアフリカ経済史研究の状況を展望してみると、グリーンとニャンバラと比べて悲観的な結論に達した。アフリカ経済史研究は近年復活（ルネサンス）を見せているが、この研究分野の出版の中ではザンベジ川とサハラ砂漠の間の諸大学に拠点を置く執筆者からもたらされる論文数は相対的に少ない。しかし、それは、学問的関心の優先順位と研究が組織される学問分野を反映している。アフリカにおける経済学部（economics department）はほとんど歴史には関心を示していない。特に最近はそのようである。これに対して歴史学部（history department）はしばしば計量的方法と経済理論の両方に警戒心をもっている。このように人文学と社会科学の間には制度的分裂がみられる。さらに、熱帯アフリカの経済史家は、他の地域の同学の諸氏と比べて主流派の経済理論やクリオメトリクスに魅力を感じていないことも確かである。これは両者が互いに他の研究の出版を十分に認識していないことを反映している。熱帯アフリカの内外の経済史家が学問的市場（intellectual market）の分裂（断片化）を協力して克服する道を示すことが必要である。そうすることで、望ましい方向性を示すとともにおそらくアフリカ地域に拠点を置く研究者から国際的な経済史雑誌への投稿がおそらく増大するであろう。（Austin 2015）
- 35) 帝国史研究（imperialist historiography）は、ますます本国・植民地間の「垂直的」（vertical）な連関からはずれ、植民地と植民地の「水平的」（horizontal）な連関にシフトしている。このシフトは、帝国の時代と脱植民地化の時代に形成された「水平的」コミュニティの多面的な形態への関心を促進してきた。この研究は、帝国から国家への単線的な軌跡を指摘し、大量の移動を背景として形成された一連の脱領土化された政治上のイマジネーションとしての「想像のトランスナショナルコミュニティ」がそれ自身研究の対象として取り上げられ、また、第三世界やグローバル・サウスの反植民地思想の前兆としてとりあげられるようになった。（Hofmeyer, 2013）近年、植民地研究および帝国史研究は、たとえばイギリスの帝国史研究がナショナルな枠組みを超えるような展開をみせながら、実は、イギリスを中心にした歴史像を再生産し、ネーションの拡大として認識されかねない問題を孕んでいたが、同時代の異なる帝国間の関係性、「間帝國的」（trans-imperial）なもの、のコンテクストにおいて支配、被支配、抵抗の展開を見ることで、これまでの研究上の難点を克服していこうという動向が見られる。（水谷 2017）
- 36) すでに述べたように、南アフリカでは、経済史研究でも新たな方向性が検討されている。フォーエ（Johan Fourie）とシャーマー（Stefan Schirmer）は、『発展途上地域の経済史』（*Economic History of Developing Regions*）に掲載された「南アフリカ経済史の将来」（“The Future of South African Economic History”）と題する論文のなかで次のように論じている。「南アフリカ経済史研究は、近年において顕著な進歩をとげてきた。しかし、多くのなすべきことが残されている。方法論と理論の両方のレベルにおいてより広い範囲にわたる研究の発展に基づいて南アフリカ経済史分析（研究）の可能性（潜在力）を高める途を探り出したい。」これについては、かつてジョン・アイリフ（John Iliffe）が『経済史レビュー』（*Economic History Review*, LII, 1999, pp.87-103.）において展望を試みており、筆者は、アイリフの論考に日本における研究動向を加えて、南アフリカ経済史の研究展望を描いたことがあった。（北川勝彦 2001）なお、ごく最近の研究動向については、宗村敦子「研究動向 『新しいアフリカ経済史』におけるイノベーション—統計加工による南アフリカ工業化論の新展開—」『思想

（岩波書店）2017年8月号参照。また、最近の南部アフリカ社会経済史のすぐれた概論として Alois S. Mlambo and Neil Parsons (2019), *A History of Sothorn Africa*, Macmillan International. を参照。

- 37) これまで戦後日本で試みられてきたさまざまなアフリカ史研究を振り返り、その知的営為が本研究で取り上げたような「アフリカ史のアフリカ化」と「アフリカ史の主流化」とどのような関係にあったかをあらためて考えねばならないであろう。以下にその知的営為の概略を示しておく。

第一に、1960年代には欧米の文献の翻訳などへの依存状態から次第に脱却し、現地調査の知見を踏まえて、当時台頭しつつあったアフリカ史研究の問題意識を吸収して独自の研究が積み重ねられようとしていた。1954年の西野照太郎の『鎖を断つアフリカ』（岩波書店）の出版をはじめ、1960年前後のバジル・デヴィッドソンの著作の翻訳（デヴィッドソン、1959年、1964）、文化人類学者やジャーナリストの研究成果、欧米の文献に依拠した研究、AA 連帯運動の一環としてのアフリカ史研究、帝国主義・ナショナリズム・パンアフリカニズムの立場にたった研究などが見られた。（宮治一雄 1984）

1970年代のアフリカ史研究については、現地調査の体験を踏まえ、人類学や経済学から出発した地域研究者が歴史研究の成果を出した。東京外大 AA 研の富川盛道（1971、1980）や川田順造（1976）の研究が公刊された。そうした成果のなからアフリカ史の概説書として山口昌男の『黒い大陸の栄光と悲惨』（1977）が出版される。同時に、アフリカ地域研究者の成果として『アフリカ現代史』全5巻の出版が開始された。（星昭・林晃史 1978、吉田昌夫 1978、宮治一雄 1978、中村弘光 1982、小田英郎 1986）この通史に加えて、特定の時期をとりあげた地域の比較史研究も現れ、（宮治一雄 1979）分割された側の視点からアフリカ史を捉えようとした通史として岡倉登志『ブラック・アフリカの歴史』（1979）が出版されている。

1980年代には、植民地宗主国側の一次史料と同時代の文献を利用した研究が始まった。残念ながら未完の事業となった UNESCO 版（1981～1993年）『アフリカの歴史』の翻訳（1988、1990、1992）が刊行された。アフリカの主体性を強調し、アフリカ人の手で書かれた歴史を日本語で共有できる意義は大きい。アフリカ史理解の根本的問題—文字史料と遺跡および編年史と時代区分—を提起した川田順造の『黒人アフリカの歴史世界』（1987）が現れ、アフリカと非アフリカとの交流史ないし関係史の研究への取り組みも始められた。

1990年代には、異文化間の交渉（交流）史（岡倉登志・北川勝彦 1993、青木澄夫 1993）、社会人類学からのアフリカ史への接近（赤坂賢・福井勝義・大塚和夫 1999）が試みられた。富永智津子（1996）は、新しい史料の発掘と利用によって歴史のディテールを埋めていくことをアフリカ史の課題として指摘した。日本人の手になる新しい通史として松田素二と宮本正興によって『新書アフリカ史』（1997）が編集された。

2000年代に入ると、富永智津子と永原陽子（2006）によって女性・ジェンダーの視点からアフリカ史像の再考に迫る研究書が公刊された。また、アフリカ史を人類史のなかに正当に位置づけ、世界史のなかでどのように中心化するか、という観点からアフリカ史の連続性にかかわる環境史、人類史および考古学の研究が著され、アフリカ史の接続性にかかわるディアスポラ史、地域史ないし地域間関係史の研究が現れてきた。（川端正久・落合雄彦 2012）加えて、アフリカ史記述の方法と史料の研究を試みたものとして、たとえば、文字史料の得られるところと得られないところで、力関係を異にする複数の文化や集団が接触し交渉する場で歴史が生まれ創られる過程の研究が永原陽子（2011）によって編集され、帝国の語りと記述を集大成したイギリス議会資料（BPP）を用いてアフリカの植民地期を再考した研究書が井野瀬久美恵と北川勝彦（2011）によって編集されている。この間、アフリカ史に関する資料調査と文献検証も進んだ。さらに、今日、日本人アフリカニスト史家としてアフリカ史に接近する上でどのような独自の問題が立てられるかについて、永原陽子（2000、2009、2011、2012）によって、アフリカ史とアジア史の複眼的同時代認識、「植民地責任」の方法態度と「真実と和解」の

歴史哲学に立つ世界史とアフリカ史の認識、アフリカ史における植民地期と前植民地期をつなぐ連続的動態史観など、21世紀後半の展望を切り拓くアフリカ史研究の課題が提起されている。（北川 2013a）

参考文献リスト

日本語文献

- 赤阪 賢・福井勝義・大塚和夫（1999）『アフリカの民族と社会』世界の歴史24 中央公論社
- 阿部年晴・小田 亮・近藤英俊編（2007）『呪術化するモダニティ—現代アフリカの宗教的实践から—』風響社
- イエルウェン、モルテン、渡辺景子訳（2015）『統計はウソをつく—アフリカ開発統計に隠された真実と現実』青土社
- 井野瀬久美恵・北川勝彦編（2011）『アフリカと帝国—コロニアリズム研究の新思考にむけて—』晃洋書房
- 岡倉登志（1979）『ブラック・アフリカの歴史』三省堂
- 岡倉登志・北川勝彦（1993）『日本—アフリカ交流史—明治期から第二次世界大戦まで—』同文館
- 小川 了（1998）『可能性としての国家誌—東アフリカ国家の人と宗教』世界思想社
- 小田英郎（1986）『アフリカ現代史5 中部アフリカ』山川出版社
- 落合雄彦編（2009）『スピリチュアル・アフリカ—多様な宗教的实践の世界—』晃洋書房
- 刈谷康太（2012）『イスラームの宗教的・知的連関網—アラビア語著作から読み解く西アフリカ—』東京大学出版会
- 川端正久・落合雄彦編（2008）『アフリカ国家を再考する』晃洋書房
- 川端正久・落合雄彦編（2012）『アフリカと世界』晃洋書房
- 川田順造（1976・1990）『無文字社会の歴史—西アフリカ・モシ族の事例を中心に—』同時代ライブラリー 16 岩波書店
- 川田順造編（1987）『黒人アフリカの歴史世界』民族の世界史12 山川出版社
- 川田順造（1993）『アフリカ』地域からの世界史9 朝日新聞社
- 川田順三編（2009）『アフリカ史』新版世界各国史10 山川出版社
- 北川勝彦（2001）『南部アフリカ社会経済史研究』関西大学出版部
- 北川勝彦（2002）「アフリカ史研究のリオリエント」川勝平太編『グローバル・ヒストリーに向けて』藤原書店、171～180ページ
- 北川勝彦（2008）「アフリカ史研究と史料批判」『アフリカレポート』第47号、1ページ
- 北川勝彦（2009）「移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動」橋本征治編『海の回廊と文化の出会い—アジア・世界をつなぐ—』関西大学東西学術研究所、101～135ページ
- 北川勝彦（2010）「移行期の西インド洋世界と東アフリカ海岸社会—モザンビーク海峡史研究の覚書—」野間晴雄編『文化システムの磁場』関西大学出版会、39～70ページ
- 北川勝彦（2012a）「アフリカ史のグローバル化と人類史の再構築」川端正久・落合雄彦編『アフリカと世界』晃洋書房、58～91ページ
- 北川勝彦（2012b）「アフリカ経済史研究の回顧と新展開」（ギャレス・オースチン共著）川端正久・落合雄彦編『アフリカと世界』晃洋書房、92～119ページ
- 北川勝彦（2012c）「アフリカ」『史学雑誌 2011年の回顧と展望』303～306ページ
- 北川勝彦（2013a）「アフリカ史 総説」「前植民地期」日本アフリカ学会編『アフリカ学事典』昭和堂、

120～131, 140～143ページ

- 北川勝彦（2013b）『アフリカ世界の歴史と文化—ヨーロッパ世界との関わり—』（共著）放送大学教育振興会
- 北川勝彦（2018）「コラム歴史の風 アフリカ史研究の課題—ユネスコ『アフリカの歴史』を回顧して—」『史学雑誌』127編11号 45～47ページ
- キーゼルボ、J. 編（1990）宮本正興日本語版責任編集、『ユネスコ・アフリカの歴史、第1巻 方法論とアフリカの先史時代』同朋舎出版
- 栗本英世・井野瀬久美恵編（1999）『植民地経験—人類学と歴史学からのアプローチ—』人文書院
- ゲルナー、E.、加藤 節監訳（2008）『民族とナショナリズム』岩波書店
- 鈴木正行（2005）『日本の新聞におけるアフリカ報道』学文社
- 園田英弘編（2005）『逆欠如の日本生活文化—日本にあるものは世界にあるか—』思文閣出版
- 戸田真紀子編（2006）『帝国への抵抗—抑圧の導線を切断する—』世界思想社
- 富川盛道（1971）「アフリカ部族社会の比較調査」『学術月報』23-12、24～28ページ
- 富川盛道編（1980）『アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語—』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 富永智津子（2002）「歴史認識の枠組としてのアフリカ地域—世界史との接点を探る—」『地域研究論集』Vol.4 No.1、51～62ページ
- 富永智津子・永原陽子編（2006）『新しいアフリカ史像を求めて—女性・ジェンダー・フェミニズム—』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 中村弘光（1982）『アフリカ現代史4 西アフリカ』山川出版社
- 永原陽子（2001）「アフリカ史・世界史・比較史」平野克己編『アフリカ比較研究—諸学の挑戦—』研究双書412号、アジア経済研究所、51～62ページ
- 永原陽子編（2009）『「植民地責任」論—脱植民地化の比較史—』青木書店
- 永原陽子（2011）『「韓国併合」と同時代の世界、そして現代—アフリカ史の視点から—』国立歴史民俗博物館編『「韓国併合」100年を問う—2010年国際シンポジウム—』岩波書店、242～252ページ
- 永原陽子編（2011）『生まれる歴史、知られる歴史—アジア・アフリカ史研究の最前線から—』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 永原陽子（2012）「植民地研究の現在—アフリカ史の場合—」『歴史評論』752号、50～62ページ
- ニアス、D. T. 編、（1992）宮本正興日本語版責任編集、『ユネスコ・アフリカの歴史、第4巻 12世紀から16世紀までのアフリカ』同朋舎出版
- デヴィッドソン、B. 西野照太郎訳（1959）『アフリカの目覚め』岩波書店
- デヴィッドソン、バズル 内山 敏訳（1964）『アフリカ史案内』岩波書店
- 日本アフリカ学会編（2014）『アフリカ学事典』昭和堂
- 平野千果子（2002）『フランス植民地主義の歴史—奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで—』人文書院
- 平野千果子（2014）『フランス植民地主義と歴史認識』岩波書店
- ボアヘン、アドウ A. 編（1988）宮本正興日本語版責任編集、『ユネスコ・アフリカの歴史、第7巻 植民地支配下のアフリカ 1880年から1935年まで』同朋舎出版
- 星 昭（1976）「アフリカ」国際歴史学会議日本国内委員会編『日本における歴史学の発達と現状』IV 東京大学出版会 427～438ページ
- 星 昭・林 晃史（1978）『アフリカ現代史Ⅰ：総説・南部アフリカ』山川出版社
- ホブズボーム、E. J.、浜林正夫・島田耕也・庄司 信訳（2001）『ナショナリズムの歴史と現在』大月書店

- 水谷 智 (2017) 「駒込史学が広げる間帝國的な視座の可能性」東京外国語大学海外事情研究所『クェドランテ』19号、1977-82ページ
- 宮治一雄 (1978) 『アフリカ現代史3 北アフリカ』山川出版社
- 宮治一雄 (1979) 「アフリカ史における両大戦間期—四地域の比較研究 序」『アフリカ研究』18、1～6ページ
- 宮治一雄 (1984) 「日本におけるアフリカ史研究」『アフリカ研究』25、114～120ページ
- 宮本正興・松田素二 (1997) 『新書アフリカ史』講談社
- 宮本正興・松田素二 (2018) 『新書アフリカ史 改定新版』講談社
- 峯 陽一 (2019) 『2100年の世界地図—アフラシアの時代』岩波書店
- 宗村敦子 (2017) 「研究動向『新しいアフリカ経済史』におけるイノベーション—統計加工による南アフリカ工業化論の新展開—」『思想』(岩波書店) 1120号、139～149ページ
- 山口昌男 (1977) 『黒い大陸の栄光と悲惨』世界の歴史6 講談社
- 吉田昌夫 (1978) 『アフリカ現代史2 東アフリカ』山川出版社

外国語文献

- Adebayo, Adekeye (2010) *The Curse of Berlin : Africa After the Cold War*, Hurst & Co., London, 2010.
- African Union Commission (2015), *Agenda 2063 : the Africa We Want*, Final Edition.
- Akyeampong, Emmanuel Kwaku (2006) ed., *Themes in West Africa's History*, Ohio University Press, Athens.
- Akyeampong, Emmanuel Kwaku and Gates, Henry Louis, Jr., eds. (2012), *Dictionary of African Biography*, 5 vols., Oxford University Press.
- Alagoa, Ebiegberi Joe (1995), *The Practice of History in Africa : A History of African Historiography*, Onyama Research Publications.
- Amakasu Raposo de Madeiros Carvalho, Pedro Miguel (2014), *Japan's Foreign Aid Policy in Africa : Evaluating the TICAD Process*, Palgrave Macmillan.
- Amakasu Raposo de Madeiros Carvalho, Pedro Miguel, Arase, David and Cornelissen Scarlett eds. (2017), *Routledge Handbook of Africa-Asia Relations*, Routledge.
- Arrighi, Giovanni, Hamashita, Takeshi and Selden, Mark eds., (2003) *The Resurgence of East Asia : 500, 150 and 50 Years Perspectives*, Routledge.
- Asante, Molefi Kete and Mazama, Ama eds. (2009), *Encyclopedia of African Religion*, 2 vols, Sage.
- Atieno-Odhiambo, E/S. (2002), "From African Historiography to African Philosophy of History", Falola, Toyin and Jennings, Christian eds., *Africanizing Knowledge : African Studies Across the Disciplines*, Transaction Publishers, pp.13-63.
- Austin, Gareth and Broadberry, Stephen (2014), "Introduction : The renaissance of African economic history", *Economic History Review*, 67-4, pp.893-906.
- Austin, Gareth (2015). "African Economic History in Africa", *Economic History of Developing Regions*, 30-1, pp.79-94.
- Baten, Joerg and Muschallik, Julia (2012), "The Global Status of Economic History", *Economic History of Developing Regions*, 27-1, pp.93-113.
- Betts, Paul, (2015) "Humanity's New Heritage : UNESCO and the Rewriting of World History", *Past and Present*, No.228, pp.249-285.
- Boahen, A. Adu (1985), *General History of Africa Vol.7 : Africa Under Colonial Domination, 1880-1935*,

- Heinemann.
- Boahen, A. Adu (1987), *African Perspective on Colonialism*, Johns Hopkins University Press.
- Brizuela-Gareth, Esperanza and Gets, Trevor (2012), *African History : New Sources ad New Teaching for Studying African Past*, Pearson.
- Brown, Lalage and Crowder, Michael eds. (1964), *The Proceedings of the First International Congress of Africanists*, Accra 11-18 December 1962, with forward by K. Onwuka Dike, Longman.
- Carruthers, Jane (2014) "To Rescue the Past from the Nation ; All for One, One for All ? Leveraging National Interests with Regional Visions in Southern Africa", *South African Historical Journal*, 66-2, pp.207-216.
- Coquery-Vidrovitch, Catherine (2009), *Africa and the Africans in the Nineteenth Century : A Turbulent History*, M. E. Sharpe.
- Cooper, Frederick (2014) *Africa in the World ; Capitalism, Empire, Nation-State*, Harvard University Press.
- Cordell, Dennis (2003), "Oral Tradition : Classic Questions and New Answers" in Falola, Toyin and Jennings, Christian eds. (2003), *Sources and Methods in African History : Spoken, Written, Unearthed*, University of Rochester Press, pp.239-248.
- Cornelissen, Scarlett and Mine, Yoichi eds. (2014), *Africa and Asia Entanglements in Past and Present*, Proceedings of GRM International Conference, Doshisha University.
- Davidson, Basil (1992) *The Black Man's Burden : Africa and the Curse of Nation-State*, Times Book.
- Denbow, James (2003) "Archaeology and History", in Falola, Toyin and Jennings, Christian eds. (2003), *Sources and Methods in African History : Spoken, Written, Unearthed*, University of Rochester Press, pp.3-6.
- Falola, Toyin and Jennings, Christian eds. (2003), *Sources and Methods in African History : Spoken, Written, Unearthed*, University of Rochester Press.
- Fenske, James (2010), "The Causal History of Africa : A Reponse to Hopkins", *Economic History of Developing Regions*, 25-1, pp.177-212.
- Fenske, James (2011), "The Causal History of Africa : Replies to Jerven and Hopkins", *Economic History of Developing Regions*, 26-2, pp.125-131.
- Fourie, Joseph and Gardner, Leigh (2014), "The Internationalization of Economic History : A Puzzle ?", *Economic History of Developing Regions*, 19-1, pp.1-14.
- Fourie, Joseph and Schirmer, Stefan (2012), "The Future of South African Economic History", *Economic History of Developing Regions*, 27-1, pp.114-124.
- Freund, Bill (1998) *The Making of Contemporary Africa : the Development of African Society since 1800*, second edition, Macmillan.
- Freund, Bill (2016) *The Making of Contemporary Africa : the Development of African Society since 1800*, third edition, Palgrave Macmillan.
- Freund, Bill (2005) "Africa in the Long Century" in Jomo, K. S. ed., *The Great Divergence : Hegemony, Uneven Development, and Global Inequality*, Oxford University Press, pp.94-115.
- Green, Erik and Nyambara, Pius (2015), "The Internationalization of Economic History : Perspective from the African Frontier", *Economic History of Developing Regions*, 30-1, pp.68-78.
- Hansen, Peo and Jonsson, Stefan (2014), *Eurafrica : the Untold History of European Integration and Colonialism*, Bloomsbury.

- Hawks, Jacquetta et al., eds. (1963-1966), *History of Mankind : Cultural and Scientific Development, Vol.1-Vol.6*, UNESCO.
- Hofmeyr, Isabel (2013) "African History and Global Studies : A View from South Africa", *The Journal of African History*, 54-3, November, pp.341-349.
- Hopkins, A. G. (2009), "The New Economic History of Africa", *Journal of African History*, 50-2, pp.155-177.
- Hopkins, A. G. (2011), "Causes and Confusions in African History", *Economic History of Developing Regions*, 26-2, pp.107-110.
- Illife, John (1999), "The South African Economic History", *Economic History Review*, LII, pp.87-103.
- Iliffe, John (2005), *Africans : the History of a Continent*, New Edition, Cambridge University Press.
- Iliffe, John (2018), *Africans : the History of a Continent*, Third Edition, Cambridge University Press.
- Ireere, F. Abiola and Jeyifo, Biodun eds. (2010), *The Oxford Encyclopedia of African Thought*, 5vols, Oxford University Press.
- Iwata, Takuo ed. (2020), *New Asian Approaches to Africa : Rivalries and Collaborations*, Vernon Press.
- Jerven, Morten, Austin, Gareth, Green, Erik, Uche, Chibuike, Frankema, Ewout, Fourie, Johan, Inikori, Joseph E., Moradi, Alexander, and Hillbom, Ellen, (2012) "Moving Forward in African Economic History : Bridging the Gap Between Methods and Sources", *Lund Papers in Economic History*, No.124, Department of Economic History, Lund University.
- Jerven, Morten (2011), "A Clash of Disciplines ? Economists and Historians Approaching the African Past", *Economic History of Developing Regions*, 26-2, pp.111-124.
- Jerven, Moten (2015), *Africa : Why Economists Get Wrong*, Zed Books.
- Kitagawa, K., (2013) "Retrospective on and Prospective for Japanese Policy on Africa —Focusing on the Tokyo International Conference on Africa Development (TICAD) Process—" *Kansai University Review of Economics*, No.15, pp.1-28.
- Kitagawa, K., (2016a) *Africa and Asia Entanglements in Past and Present : Bridging History and Development Studies*, Asian and African Studies Group, Faculty of Economics, Kansai University.
- Kitagawa, K. and Takahashi, M (2016b), *Contemporary African Economies : A Changing Continent under Globalization*, African Development Bank.
- Kitagawa, Katsuhiko (2020), *Japan's Economic Relations with Africa in a Historical Perspective: A Study of the Pre-war Japanese Consular Report*, Kansai University Press.
- Koser, Khalid ed. (2003), *New African Diasporas*, Routledge.
- Kotieh, Chima J. and Njoku, Raphael Chijioke eds. (2007), *Mission, States and European Expansion in Africa*, Routledge.
- Laet, S. J. et al eds. (1994-2008), *History of Humanity, Vol.1-Vol.7*, UNESCO.
- Mamdani, Mahmood (1996), *Citizen and Subject : Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism*, James Currey,
- Mamdani, Mahmood (2012), *Define and Rule : Native as Political Identity*, Wits University Press.
- Manning, Patrick (2009). *The African Diaspora : A History through Culture*, Columbia University Press.
- Manning, Patrick (2013) "African and World Historiography", *The Journal of African History*, 54-3, pp.319-330.
- Mazrui, Ali A. and Adem, Seifuden, (2013) *Afrasia : A Tale of Two Continents*, University Press of America.

- Mkandawire, Thandika, (2015) *Africa : Beyond Recovery*, Sub-Saharan Publishers.
- Mlambo, Alois S., and Parsons, Neil (2019), *A History of Southern Africa*, Macmillan International.
- Moyo, Sam and Yeros, Paris eds. (2011), *Reclaiming the Nation : The Return of the National Question in Africa, Asia and Latin America*, Pluto Press.
- Mudimbe, V. Y. (1988), *The Invention of Africa : Gnosis, Philosophy and Order of Knowledge*, Indiana University Press.
- Mudimbe, V. Y. (1994), *The Idea of Africa : African System of Thought*, Indiana University Press.
- Mungazi, Dickson A. (1996), *The Mind of Black Africa*, Praeger.
- Olaniyan, Tejumola and Sweet, James H., eds. (2010) *The African Diaspora and the Disciplines*, Indiana University Press.
- Parker, John and Reid, Richard eds (2012), *The Oxford Handbook of Modern African History*, Oxford University Press.
- Parsons, Neil (2014) "Towards a Broader Southern African History : Backwards, Sideways, and Upside-Down", *South African Historical Journal*, 66-2, pp.217-236.
- Pawlikova-Vilhanova, Viera (2011), "Debating the Fontes Historiae Africanae Project and the Production of Historical Knowledge in Africa". *Asian and African Studies*, 20-1, pp.142-149. (Slovenska Akademie vied, Slovak Academy of Science)
- Philip, John Edward ed. (2005), *Writing African History*, University of Rochester Press.
- Ranger, Terrence (1968), *Emerging Themes of African History : Proceedings of the International Congress of African Historians held at University College, Dar es Salaam, October 1965*, Heinemann Education Books Ltd.
- Ranger, Terence (2013) *Writing Revolt : An Engagement with African Nationalism, 1957-67*, James Currey.
- Robinson, David (2004), *Muslim Societies in African History*, Cambridge University Press.
- Schirmer, Stefan, Chaudary, Latika, Cosget Metin, Demonsant, Jean-Luc, Fourie, Johan, Frankema, Ewout, Garzarelli, Giampaolo, Luiz, John, Mariotti, Martine, Verhoef, Grietjie, and Yan Se (2010), "The State and Scope of the Economic History of Developing Regions", *Economic History of Developing Regions*, 25-1, pp.3-20.
- Shillington, Kevin (2005), *Encyclopedia of African History*, 3 vols, Fitzroy Dearborn.
- Smith, Anthony D. (1983) *State and Nation in the Third World*, Wheatsheaf Books.
- Smith, Anthony D. (1986) *The Ethnic Origins of Nations*, Basil Blackwell.
- Taylor, Ian (2011), *The Forum on China-Africa Cooperation (FOCUC)*, Routledge.
- Verhoef, Grietjie (2020), "Obituary, Frank Stuart Jones, 29 March 1933-19 October 2019", *Economic History of Developing Regions*, 35-1 · 2, pp.1-2.
- Young, Crawford (1994) *The African Colonial State in Comparative Perspective*, Yale University Press.
- Young, Crawford (2012) *The Post Colonial State in Africa : Fifty Years of Independence, 1960-2010*, University of Wisconsin Press.
- Zewde, Bahru ed. (2008), *Society, State and Identity in African History*, Forum for Social Studies
- Zimmerman, Andrew, (2013) "Africa in Imperial and Transnational History : Multi-sided Historiography and the Necessity of Theory", *The Journal of African History*, 54-3, 2013, pp.331-340.

付表 1

History of Mankind : Cultural and Scientific Development, UNESCO 概要

巻	概要
第1巻	<p>先史</p> <p>第1部 先史時代 セクション1 旧石器時代、セクション2 中石器時代</p> <p>第2部 文明の始期 II 社会の都市化(エジプト) VIII 宗教的信奉と実践(エジプト)</p>
第2巻	<p>古代世界</p> <p>第1部 1200BC~500BC I.5 大西洋諸島、アメリカおよびアフリカ</p> <p>第2部 500BC~キリスト教時代 VIII.2 エチオピア</p> <p>第3部 キリスト教時代の始期からAD500頃 XIII.8 エチオピアの宗教</p>
第3巻	<p>中世文明</p> <p>第1部 歴史的背景</p> <p>第2部 文化の達成 セクション1 技術の発展—言語と知識 セクション2 宗教と哲学、法と政治 セクション3 科学的思想、文学と芸術の表現</p> <p>第3部 アフリカ、南北アメリカ、オセアニア XV アフリカの先史時代 XV-1 アフリカの歴史研究 XV-2 中世期の世界におけるアフリカのプレゼンス XV-3 7世紀から13世紀のアフリカ文化 XV-4 中世期アフリカの学知の改善にむけたアプローチ</p>
第4巻	<p>近代世界の基礎</p> <p>第1部 政治、経済、社会の背景—主要な宗教的事件、社会政治思想</p> <p>第2部 知識の伝達と文学—芸術、音楽、科学と技術、技術と社会、教育</p>
第5巻	<p>19世紀</p> <p>第1部 科学革命</p> <p>第2部 産業革命と技術発展(1775~1905)</p> <p>第3部 社会、文化および宗教の諸側面 XXII 南アフリカとオーストラリアにおける西洋文明 XXII-1 南アフリカの発展</p> <p>第4部 ヨーロッパの帝国、科学技術の進歩、文化対立 XXVI アフリカとオセアニア：ヨーロッパ文明との接触 XXVI-1 アフリカとオセアニアへの科学文明の拡散と抵抗</p>
第6巻	<p>20世紀</p> <p>序文 世界史の一時期としての20世紀</p> <p>第1部 科学的知識の開発と応用 セクション1 新しい科学思想 セクション2 自然科学の精緻化と応用 セクション3 生物科学の発展と応用 セクション4 人間の行動への知識の応用と社会科学の発展</p> <p>第2部 社会の変革</p> <p>第3部 世界の人々の自画像と願望 XXVIII 諸国民の自画像と願望 XXVIII-IV 人種的優越性</p>

XXVIII-IV-2 <u>南アフリカ</u> XXVIII-VII ナショナリズムの台頭： <u>アフリカ</u> 第4部 表現 結語 人類の生活の変貌

(出所) UNESCO, *History of Mankind: Cultural and Scientific Development*, 6vols 各巻の目次より作成。

付表 2

History of Humanity : Scientific and Cultural Development, UNESCO 概要

巻	概要
第1巻	先史時代と文明の始期 第1部 人類起源論から食料生産の開始まで A 人類起源論からホモハビリス、ホモエレクトスの時代 A-3 <u>Africa</u> during the Lower Palaeolithic and the first settlements, Jean Chavaillon B ホモサピエンス、ネアンデルターレンシスの時代 B-11 <u>Africa</u> during the period of Homo sapiens neanderthalensis and contemporaries, Fred Wendorf, Angela E. Close and Romuald Schild C 食料生産までのホモサピエンス（現人）の時代 C-20 <u>Africa</u> from the appearance of Homo sapiens sapiens to the beginning of food production, J. Desmond Clark 第2部 食料生産の開始から最初の国家まで 40 <u>Africa</u> (excluding Egypt) from the beginnings of food production up to about 5000 years ago, David W. Phillipson
第2巻	紀元前第三千年紀（3000年）～紀元前7世紀 A 序文 先史時代から歴史時代へ（Prehistory to history, Sigfried J. De Laet） （Main trends of the new period, Ahmad Hassan Dani and Jean-Pierre Mohen） B テーマ・セクション C 地域セクション I 記述された史料が利用可能な地域 C-I-10 <u>Africa</u> C-I-10-1 The Nile Valley (3000-1780BC) , Christian Ziegler C-I-10-2 The Nile Valley (1780-700BC) C-I-10-2-1 Egypt, Gamal Mokhtar C-I-10-2-2 Nubia and its relationship with Egypt (1780-700BC) , Theophile Obenga II 考古学、人類学の資料が利用可能な地域 C-II-13 <u>Africa</u> , excluding the Nile Valley, Louise M. Diop-Maes, Aboubacry M. Lam, Massmaba Lam, Theophile Obenga, David W. Phillipson, Babacar Sall
第3巻	紀元前7世紀～7世紀 A 序文 全体の概観, Joachim Herrmann and Erik Zurcher B テーマ・セクション C 地域セクション 序文 Joachim Herrmann and Erik Zurcher 西アジア、地中海世界とヨーロッパ史、 <u>アフリカ大陸</u> 、南アジア、東南アジア・オーストラレシア・太平洋、中央アジアとノマッド、東アジア、南北アメリカ C-III <u>African Continent</u> Introduction, David W. Phillipson C-III-14 <u>North Africa</u> (14-1～14-6)

	<p>C-III-15 The Nile Valley (Editor's note, David W. Phillipson) C-III-15-1 Egypt (15-1-1~15-1-5) C-III-15-2 Nubia (15-2-1~15-2-3) C-III-16 <u>Sub-Sahara Africa</u> C-III-16-1 'Neolithic' in West Africa, Alex Ikechukwu Okpoko C-III-16-2 'Neolithic' in Central Africa, Raymond Lanfranchi C-III-16-3 'Neolithic' in Eastern Africa, David W. Phillipson C-III-16-4 Early metal-using peoples in West Africa, the late Nwanna Nzewunwa (revised by David W. Phillipson) C-III-16-5 Aksumite Ethiopia and its precursors, Francis Anfray C-III-16-6 Early Farming Peoples in Central, Eastern, and Southern Africa, David W. Phillipson</p>
第4巻	<p>7世紀~16世紀 A 序文 全体の概観, Mohammad Adnan Al-Bakhit, Louis Bazin and Sekene Mody Cissoko B テーマ・セクション B-3 The State and the law B-3-6 <u>Africa</u>, Isidore Ndaywei e Nziem C 地域セクション グレコローマン世界の継承地、ヨーロッパのパーソナリティの形態、イスラーム世界とアラビア語地帯、アジア世界、<u>アフリカ大陸</u>、南北アメリカの文明、オセアニアと太平洋 C-V <u>The African continent</u> Introduction, Sekene Mody Cissoko C-V-32 West Africa C-V-32-1 The peoples, Sekene Mody Cissoko C-V-32-2 The economy, Sekene Mody Cissoko C-V-32-3 Societies and political structure, Sekene Mody Cissoko C-V-32-4 Religions C-V-32-4-1 Traditional African religions, Isaac Adeagbo Akinjogbin C-V-32-4-2 Islam and Christianity, Sekene Mody Cissoko C-V-32-5 Arts and Sciences, Isaac Adeagbo Akinjogbin C-V-33 Nubia and Nilotic Sudan, Yusuf Fadl Hasan C-V-34 Ethiopia, E. J.van Donzel C-V-35 The East Coast and the Indian Ocean islands C-V-35-1 Environment and Technique, Edward A. Alpers C-V-35-2 Trade and urban development, Edward A. Alpers C-V-35-3 Arab-Muslim Cultures and local cultures on the east coast of Africa and the Indian Ocean islands, Victor Matveyev C-V-35-4 Mixed culture of Madagascar and the other islands, Edward A. Alpers C-V-35-5 International importance of the region, Edward A. Alpers C-V-36 Central and Southern Africa, Isidore Ndaywel e Nziem</p>
第5巻	<p>16世紀~18世紀 A 序 全体の概観, Peter Burke and Halil Inalcik B テーマセクション B-6 Colonialism B-6-1 Introduction, Irfan Habib B-6-3 Europeans in Africa, Jean Boulegue C 地域セクション</p>

	<p>西ヨーロッパ、東・中央ヨーロッパ、ロシア、南東ヨーロッパ、オスマン帝国、アラブの土地、イラン・アルメニア・グルジア、中央アジア、南アジア、東南アジア、中国、日本と韓国、チベット文化地域、北アメリカ、ラテンアメリカとカリブ諸島、<u>アフリカ</u>、オセアニア</p> <p>C-27 <u>Africa</u></p> <p>C-27-1 Economy and Society, Abiola Felix Iroko</p> <p>C-27-2 Political structures and trends, Abiodun Adebayo Adediron, Isidore Ndaywel e Nziem, Bubuda A. Itandala, Hoyini H. K. Bhila, Isaac Adeagbo Akinjogbin, Elisee Soumonni</p> <p>C-27-3 Culture, Harris Memel-Fote</p>
第6巻	<p>19世紀</p> <p>A 序 全体の概観, Peter Mathias</p> <p>B テーマ・セクション</p> <p>B-2 The international context</p> <p>Introduction, Herman Van der Wee</p> <p>B-2-1 Europe, America and <u>Africa</u>, Jan Blomme</p> <p>B-8 Cultural development, arts and architecture</p> <p>B-8-5 <u>Sub-Saharan Africa</u>, Roger Some</p> <p>C 地域セクション</p> <p>ヨーロッパ、北アメリカ、ラテンアメリカ・カリブ、アジア、西アジアと<u>地中海アフリカ</u>、<u>サブサハラアフリカ</u>、オーストラレシアと太平洋</p> <p>C-14 Western Asia and <u>Mediterranean Africa</u></p> <p>Introduction, Abdul-Karim Rafeq</p> <p>C-14-2 The Maghrib, Azzedine Guellouz</p> <p>C-15 <u>Sub-Saharan Africa</u></p> <p>C-15-1 Africa under French domination, Christophe Wondji</p> <p>C-15-2 Countries of Western and Central Africa colonized by Britain and Germany, Fracis Agbodeka</p> <p>C-15-3 Countries of Central and Eastern Africa colonized by Belgium and Germany, Emile Mworoha</p> <p>C-15-4 Eastern Africa, A. Buluda Itandala</p> <p>C-15-5 The Portuguese speaking Africa, Maria Emelia Madeira Santos</p> <p>C-15-6 Southern Africa, Ngwabi Bhebe</p> <p>C-15-7 The Indian Ocean, Rajaonah V. Faranirina and Christophe Wondji</p> <p>C-15-8 Conclusion, Christophe Wondji</p>
第7巻	<p>20世紀</p> <p>A 序 世界史における20世紀 The Twentieth century in world history, George-Henri Dumont</p> <p>B テーマ・セクション</p> <p>B-7 New countries and world politics, Introduction, Iba Der Thiam</p> <p>B-7-2 <u>Africa</u> and the new international economic order, Edmond Kwam Kouassi</p> <p>B-12 Traditional science and knowledge in East Africa, Judith Mbula Bahemuka and Wellington N. Ekaya</p> <p>B-19 The disciplines of the sciences of society, Introduction, Peter Wagner and Bjorn Wittrock</p> <p>B-19-1 History, Rolf Torstendahl</p> <p>B-19-2 Anthropology and Ethnology, Heidrun Friese</p> <p>B-19-3 Archaeology, Andrew Colin Renfrew</p> <p>B-19-4 Demographics, Tian Xueyuan</p> <p>B-19-5 Sociology, Peter Wagner</p> <p>B-19-6 Economics, Claudio Sardoni</p>

<p>B-19-7 Legal Sciences, Nicola Lacey B-19-8 Political science, Bjorn Wittrock B-19-9 Linguistics, Stephen A. Wurm B-19-10 Geography, Paul Claval C 地域セクション 西ヨーロッパ、東および中央ヨーロッパ、北アメリカ、南および中央アメリカとカリブ海、<u>西アジアとアラブ世界、サブサハラアフリカ</u>、南および東南アジア、東アジア、オセアニア C-34 <u>West Asia and the Arab world</u> Introduction, Anouar Abdel-Malek C-34-7 Egypt, Anouar Abdel-Malek C-34-8 The Sudan, Saidou Kane C-34-9 The Maghreb - Lybya, Tunisia, Algeria, Morocco, Mauritania, Saidou Kane C-35 <u>Sub-Sahara Africa</u>, Iba Der Thaim, J.F. Ade-Ajayi, Lameck K. H. Goma, Thierno Bah, Joseph-Roger de Benoist, Pierre Kirpe, Elisee Coulibaly, Penda M' Bow, G. B. Ogunmola, Arlindo Gocalo Chilundo</p>
--

(出所) UNESCO, *History of Humanity : Scientific and Cultural Development*, 7 vols 各巻の目次より作成。